白波の食卓

キャスト

阿部　祥子　（あべ　しょうこ）　三十歳　阿部家の長女　愛実の友人

阿部　基子　（あべ　もとこ）　二四歳　阿部家の次女　東京在住　社会人

中村　美咲　（なかむら　みさ）　二五歳　基子の友人　東京在住　フリーター

今里　愛実　（いまざと　めぐみ）　三十歳　祥子の友人　信太郎の姉

今里　信太郎　（いまざと　しんたろう）　十七歳　地元の高校生　愛実の弟

亀山　公達　（かめやま　きみたつ）　三三歳　愛実・祥子の友人　祥子の元恋人

阿部　健一　（あべ　けんいち）　六二歳　祥子・基子・夏彦の伯父さん（祥子の父の兄）
近所に住んでいる。

中島　留美　（なかしま　るみ）　三十一歳　祥子・基子の従姉妹（健一の娘）
既婚者。市内に住んでいる。

中島　陽平　（なかしま　ようへい）　二十九歳　留美の夫。海上自衛隊勤務。

川西　紗央里　（かわにし　さおり）　十七歳。信太郎の同級生。阿部家の倉庫をバンドの
練習場に使わせて欲しいと言ってきている。

横石　結衣　（よこいし　ゆい）　十七歳。紗央里のバンド仲間で、信太郎の同級生。

阿部　夏彦　（あべ　なつひこ）　享年二二歳
五年前、溺れている信太郎を助け海で死亡。

（開幕）

音楽。

☆　長崎県佐世保市鹿子前町（ながさきけんさせぼしかしまえ）　海の側の一軒家。

青い照明の中、線香の匂いが立ち込めている。
それぞれが思い思いの方をみて手を合わせている。（あわせていない者もいる。）
やがて、その光景は波の音に溶ける。

（暗転）

二〇〇八年八月十一日　時刻は正午少し過ぎ。
阿部家の長男、阿部夏彦の命日。
集まっているのは、生前の夏彦に縁のある者だった。

健一の言葉を切っ掛けに、笑いが起こる。

舞台明るく。

そこは阿部家の居間。　居間の奥に廊下、上手に階段が見える。
その階段から降りてきて、一人、忙しそうに台所へ走りぬけたのが、阿部祥子。
阿部家の長女で夏彦の姉。

下手には奥へ続くような廊下が見え、その奥が仏間になっている。
そこから、微かにりんの音が響く。　そして、一人の女性が現れる。
居間では、女性に気付かず、寿司や仕出し料理を取り囲んでいる人々が。
ビールを注ぐ人、寿司を頬張る人。　その女性…今里愛実が、それをただ見ている。

手伝う風でもなく、さっきから寿司を頬張ってるのが、阿部基子。　祥子、夏彦の妹。
輪の中で一番陽気な男性が、阿部健一。　祥子、基子の伯父さんで、留美の父親。
大きなお腹を抱え一見して妊婦と判る女性が、祥子と夏彦、基子の従姉妹で中島留美。
その隣に座っている男性が、中島陽平。　留美の夫。
陽平の隣の、人の良さそうな男性が、亀山公達。亡くなった夏彦の友人でもあった。

上手に一番近い席で居心地が悪そうに俯いているのが、今里信太郎。
信太郎の隣に、馴染みのない女性が一人座っている。
彼女は中村美咲。　美咲は基子の友人だが、夏彦にも、ここにいる他の人間にも何の縁もない。　ただ、勧められるままに食べ、飲んでいる。

ビールを持って、祥子が居間へ戻る。
愛実はそれを待っていたように祥子へ駆け寄り、そっと声をかける。

愛実　あの、私、そろそろ…、
祥子　え？

愛実　今日は、もう失礼しようかと思って。　ね？信太郎。
祥子　でも、そがん、
愛実　線香あげに来ただけやけん。　ホラ、信太郎。（信太郎を促す。）
信太郎　うん。（立ち上がりかける）
美咲　帰るの？
信太郎　え？　あ、はい。
美咲　まだいいじゃん。
愛実　いや、これからちょっと行くところのあるけん。
基子　信太郎、帰るとや？
留美　盆は誰だって忙しかさ。
健一　よか。　そがん、慌てて帰らんちゃ。
留美　帰るって言いよらすやろうもん。
祥子　よかとよ。　まだゆっくりして行けば？
美咲　（信太郎に）残れば？
基子　愛実ちゃん、もうちょっとよかたいね。
愛実　…や、…でも、
美咲　いいじゃん。　もうちょっとくらいさあ。
祥子　信太郎君も、食べて行ってよ。
健一　そうばい。　お前、コッチ来て食べんや。
留美　もー。　お父さん！
信太郎　あの、

☆　信太郎、返事をしそびれてる間にも、美咲から強引に輪の中に引っ張りこまれる。

祥子　愛実もよかったら、
愛実　ウチは、ホントに行かんば所のあるけん。
祥子　そうね。
愛実　じゃあ、…信太郎ばお願いしてよかやろか？
祥子　ああ、うん。
愛実　じゃあ、ごめんね。　…信太郎、程々にしとかんばよ。
信太郎　うん…。

☆　愛実、留美の目を気にしながら奥の廊下へ。

愛実　じゃあ、すみませんけど、
公達　あ、愛実ちゃん。（立ち上がって愛実の側に行く）　また、その内ゆっくりね。
愛実　…うん。　そうね。
基子　気を付けてね。
健一　なんや、愛実ちゃんはデートね？
留美　いらん事ば言わんと。

☆　愛実、健一の言葉に微かに微笑み、下手（玄関）の方へ去る。
祥子が後に続いて、愛実を見送りに行く。

公達　（席に戻りながら）…信太郎、ゆっくりしていかんね。

信太郎　…うん…。
留美　何ね、公達っちゃん。 我が家のごたん言い方ね。
公達　いや、そがんつもりじゃなかさ。
基子　お前（信太郎）、根暗になったな。
健一　幾つになったとか？
信太郎　…十七。
美咲　十七？ 十七ぃ？
信太郎　はい。
公達　ホラ、何か取ってやろうか？ お前寿司好きやろ？
健一　そうか、もうそがん大きくなったとや。
公達　阿部さん、一年前もそがん事言いよったたいね。
健一　そうやったかね？
留美　ダメダメ。 もう最近じゃ、一分前のことも覚えとらんよ。
基子　伯父ちゃんは幾つになったとかね？
健一　十七。
基子　……。
公達　…基子ちゃん。 笑ってやらんね。
留美　基子、笑ってやってよ。
基子　ああ、うん。（相手にしないで寿司を食べている。）
美咲　ねー、そろそろ紹介してよ。
基子　あ？
美咲　だって、誰が誰か解んないよ。

☆　一同（基子と美咲以外）美咲を見る。

基子　あー、…そうかね？
公達　えーっと、基子ちゃん？
基子　あ、コイツはウチの友達。 えーっと、中村美咲って名前。
留美　はじめまして。
健一　べっぴんさんと思って見よったとよ。 あぁ、そうね。（美咲のグラスにビールを注ぐ）
美咲　私じゃなくて、私に皆を紹介してよ。
基子　ココじゃお前の方がアウェイやろ？
美咲　この子が信太郎君？ （信太郎を指す）
基子　そう。

☆　祥子、上手から現れ、居間を通過して下手の奥へ 行こうとする。
留美が祥子に気付いて

留美　祥子ちゃん。 祥子ちゃんも座って食べんね。
祥子　あ、…うん。
美咲　じゃあ、さっきのが信太郎君のお姉ちゃん？
基子　そう。
祥子　皆、お酒は足りとる？ 日本酒もあるけど。 信太郎君は？ ジュースがいい？
信太郎　あ、俺は別に、
祥子　お茶もあるし、持って来るけん。

信太郎　あ、や、

☆　祥子、下手奥へ引っ込んでゆく。（台所がある方向）

留美　もー、祥子ちゃん。よかけんが！

☆　留美も祥子を追いかけて下手奥へ。

基子　（信太郎のコップにビールを注いで）ホラ、飲め。
信太郎　え？
公達　あ、基子ちゃん。
美咲　で？　この人（公達）は？
基子　（美咲に）あ？
信太郎　いや、おい、お酒は…、
基子　（信太郎に）よかけん、飲め。
公達　（美咲の言葉を受けて）あ、おいは…、僕は、祥子ちゃんの友達で、
健一　友達って！　あはははは。
公達　何ですか？
健一　何や、水臭か。
基子　ホラ、一気に飲め。
信太郎　……。（勢い付けてビールを飲む。）
美咲　おー、行くねぇ！
公達　ダメばい、信太郎。
健一　友達なんかじゃなかやろうがぁ。（公達のグラスにビールを注ぐ）
公達　いや、もう、ほんと、阿部さん…。

☆　祥子がウーロン茶のペットボトルを持って戻ってくる。

健一　もうよかけん、祥子、座っとかんや。
祥子　うん。

☆　基子と美咲で、信太郎を挟む。
祥子の目を盗んで、信太郎のグラスにビールを注ぐ。

公達　お疲れやったね。
祥子　いや、でも、留美ちゃんも手伝ってくれらすけん。
健一　あいはどこ行った？
祥子　奥で、…何か電話しよるごたん。（空いているところへ座る。）
ありがとね、伯父ちゃん。今日は、本当に助かったよ、留美ちゃんの来てくれて。
健一　何言いよっと。そがんとはよかって。夏彦は、あいは、二十三やったかね？
祥子　二十二やったね。
健一　あいは、学校の先生になるって言いよったかね？
祥子　そいは勇治君やろ？
健一　勇治？　そうやったかね。
祥子　夏彦は先生になるっては言いよらんやったね。

健一　そんで、勇治は先生になったとか？
祥子　うん。電話ではそがん言いよったけど。
健一　…まぁ、勇治はどがんちゃよか。
祥子　伯父ちゃん、酒にするね？
健一　いや、まだビールでよかばい。
公達　でも、…まぁ、今年は基子ちゃんも帰って来れて良かったね。
祥子　……。

☆　祥子の沈黙を受けて、基子、祥子にピースする。　祥子は基子から目をそらす。

健一　夏彦は息子みたいなもんやった。
祥子　けど、伯父ちゃんには立派な息子さんの出来たたいね。
陽平　あ、はい。（と答えつつ、健一の視線を気にする）
公達　夏彦って言えば、おいは未だに忘れきれんけど、夏彦と釣りばしよって、
　アイツの釣った魚がえらい小さかったけんさ、アイツはキャッチアンドリリース
　って、海に戻したとよ。
健一　何ば釣ったとや？
公達　ボラでしょうね。成魚やったとけど、小さかったと。
健一　逃がしたとや？
公達　逃がしたとですけど、そいから一ヵ月後に、夏彦が大真面目な顔でこがん言うと
　ですよ。『公達っちゃん。この間逃がした魚が、恩返ししに来てくれたとよ。』
　って。
健一　あははは。
基子　バカばい、兄ちゃん。
公達　聞いたことなかね、基子ちゃん。　夢に魚の出てきて、朝起きたら、庭ば
　掘ってみろって言われたと』って。
基子　ってゆーか、兄ちゃん、いっつもそがん事ばっか言いよったもん。
健一　掘ったとや？
公達　掘ったって。
基子　何の出てきたと？
公達　昔なくしたオモチャの出てきたとって。
信太郎　ぶ。（噴き出すが、慌ててロもとを押さえる）
祥子　くだらんね。
基子　バカやねぇ、兄ちゃん。
健一　いやぁ、アイツは大物やったよ。
基子　大物っていうかさぁ、ウチも忘れきれん事のあるとけど、

☆　留美が台所から戻る。

健一　お前は、ちょろちょろせんで、ちゃんと座っとけ。
留美　なん？　なんの話？
公達　夏彦の。
基子　兄ちゃんの話さ。その目の前の海でさ、基子、こっからここまではおいの海ばい。
　お前はこっからそこまでばい。』ってさ、真面目な顔して言うちゃんね。
留美　ああ、言いよった。　アイツは、そがん事ばっかり言いよった。

基子　そいも、もう大学生の時にばい？　小学生がそがん事言うなら解るけど。
公達　あそこからあそこの船はおいの船ばいとかね。
健一　よかやっか。　男らしかやっか。
基子　男らしかかねぇ？
留美　けど、男らしかかどうかは知らんけど、行動力はあったわ。
美咲　じゃあ、あんた（基子）がオトコになったようなモンか。
基子　ウチはあがんバカじゃなか。
健一　だいも、夏彦がバカなんか言いよらんやっか。
留美　いや、基子はよう似とるよ。
基子　げ！　いやばい。
祥子　いっちょん家の事ば考えとらん所がね…。

☆　一同、静まる。

祥子　留美ちゃんはいつでも手伝いに来てくれるとに。　あんたはいっちょん当てにならん。
留美　祥子ちゃん。
基子　……。（箸を置く）
美咲　なんて言われたの？
基子　なんも、今言わんちゃよかろうもん。
美咲　何て言ったの？（祥子に聞く）
祥子　今言わんでいつ言うとね？　あんた、どうせロクに家におらんつもりやろ？
基子　……。
留美　基子。　姉ちゃんは寂しかっさ。
健一　いや、けど、祥子ちゃん。　留美やったらいつでも使ってよかけん。
陽平　ホントに、いつでも、大丈夫ですよ。
健一　そがん言うて！　お前が転勤でよそに連れて行くっちゃろうが！
留美　もぉ、やめんね、その話はもう終わったやろうもん！
健一　何も終わっとらん！
留美　もー、うるさか！
公達　基子ちゃんも忙しかっさね。　中々ねぇ、若い頃は帰って来んもんよ。
祥子　……。
美咲　お姉ちゃん。（祥子へ）
祥子　……（美咲が自分を見ているのに気付いて）　は？
美咲　代わりに私が妹になってあげようか？
祥子　……。
基子　あんた、バカか。
美咲　だって、基子のアパート、超最悪ですよぉ？　冷蔵庫なんか、もぉ、ジャングルって感じでぇ。　これは女じゃないよ。　もはや、オスだもん。
健一　なんやぁ、基子。　お前、ちゃんと料理とかしよらんとか？
基子　しよるさ。　この間なんか、自分で肉ば焼いて食うたとやけん。
美咲　敷きっぱなしの布団を上げたらさ、潰れた煎餅が出てくるし。
祥子　あんた！
信太郎　ひどさ…。
基子　あ？（信太郎を見る）

☆　信太郎、基子から目をそらす。

健一　お前は…、バカ！　どがん生活しよるとか！
留美　ホント、夏彦のごたんよね。
祥子　もー！　あんた、恥ずかしか！
基子　ウチは恥ずかしくなか。
美咲　洗濯物も、二、三日干しっ放しだし。
祥子　基子。
公達　や、でも、ホラ！　基子ちゃんは、…ホラ！　そいが基子ちゃんたい！
健一　お前、そがんしとったら嫁の貰い手のなかばい。
留美　よかよか。　まだ嫁なんか行かんちゃ。
基子　ウチより、姉ちゃんが先やろ。

☆　一同、静まる。

公達　基子ちゃん、そがんとに順番はなかよ。
祥子　…今はそがん話ばしよるっちゃなか。
基子　自分ばっかり、そがん言うて。
留美　あー、もう。やめんね。　夏彦の命日ばい？　喧嘩せんで。
祥子　喧嘩じゃなかけど、
健一　ってゆーかぁ、ホラ、公達！　きーみーたーつぅ！
公達　え？
健一　祥子ちゃんには、公達のおるやっか。
留美　お父さん！
健一　うお？　なんや？
留美　酔っ払ってから、もう？　勝手な事ばっかり言わんよ！
健一　いや…、ってゆーかぁ、
留美　ってゆーかぁって言うな！
公達　いや！　そいは、阿部さん！　いや、おいの『や』はその『嫌』じゃなくて、
『や、ちょっと待ってくださいよ』の『や』やけど…！

☆　祥子、立ち上がる。

祥子　お酒、つけて来るけん。
留美　あ、祥子ちゃん、ウチが…、
祥子　よかよ、留美ちゃん。　ゆっくりしとって。

☆　祥子、台所へ。　留美、縮み上がっている健一と公達を見る。

留美　だいが、そがん呑んで良かって言うた？
健一　な、…なんね。
陽平　留美ちゃん、あの、
留美　あんたも、飲み過ぎばい。
陽平　あ、…はい。
留美　お父さん、いい加減にせんと、お母さんに言うけんね！

健一　いやん。
公達　ごめんね、留美ちゃん。
留美　…公達っちゃんが謝る事なかけど…、
基子　そう言えば、今日は冴子小母ちゃんは？
健一　あいは仕事よ。夏彦の命日とにね、ホントに、
留美　ホントにじゃなか！
健一　怒るなって！
陽平　留美ちゃん、あんまり興奮したら、…赤ちゃん。
留美　お父さんには飲ませんでって言うたたいね！　ちゃんと見とってよ！
陽平　ごめ、
留美　何でお父さんは、そがんデリカシーのなかと？　言うてよか事と悪か事の区別も付かんと？
美咲　英語みたい。
留美　は？
美咲　怒ってるから早口なの？　ね、基子ももっと早く喋れるの？
信太郎　ぶ。
美咲　信太郎は？　あんたは何で、そんなに喋んないの？
信太郎　あ、…あの、
留美　東京の人？
美咲　はい。
留美　…やっぱ、…何て言ってるかわかんない？
美咲　いやぁ、やっぱ、喧嘩に聞こえる。すごい、すごい。
留美　ウチは特に早口やんね。ねぇ？（陽平に）
陽平　いや、そんな事ないよ。留美ちゃんはそれくらいの方がいいよ。
留美　あんたも、最初は解らんって言いよったたいね。
陽平　言ったけどさ、
美咲　ふーん。じゃあ、留美ちゃんのは最上級に早い九州弁？
留美　まあ、…今はちょっと、…早かったかな…。
美咲　へぇ。不思議―。ね、基子ももっと早く喋れんの？
基子　もう、ペラペラよ。
留美　何ね。あんたはいっちょ前に標準語喋りよるとね？
基子　まぁねぇ。通じたり通じんやったりするけんね。
美咲　私と会った頃は、もう既に標準語喋ってたよね。
基子　コッチの言葉なんか、使うときなかけんね。
美咲　なかけんね…。（アクセントが違う）
留美　ふーん。コッチ来たら、やっぱ戻るんだ。
基子　うん。ペラペラやけんね。
美咲　で？　信太郎は喋れないの？
信太郎　いや、喋れんって言うか…、
基子　あーあ。久々に帰ってきたけど…、
留美　…何ね？
基子　…別に。
健一　お前が、いっちょん帰って来んけん。
基子　……。
留美　…まぁ、せっかく帰ってきたとやけん、大人しく姉ちゃんの手伝いばせんね。

基子　手伝いって、
美咲　でも、明日から観光、目白押しだもんね？
留美　観光ってね、あんた、
健一　そうや。（美咲に）どこに行かすと？
留美　どうせ、ハウステンボス行って、パールシー行って、
公達　佐世保バーガー食べてね。
美咲　すっごーい！　何で解るの？
留美・公達　そいしかなかもん。
基子　あとは、海水浴な。この辺の海は良かばい。
美咲　目指せ！　小麦色の肌！
公達　…海に行くとね…？
基子　行くっつーか、もうそこ（家の前）が海やし。
美咲　ビール呑んで、泳いで、砂浜で寝て、とにかく焼く！
留美　…祥子ちゃんには…、
基子　大丈夫さ。
健一　よかやっか！　わっか人は泳ぎたかさ。釣りはせんや？　船ば出そうか？
公達　あぁ、いいですね、釣り。
留美　…そうけど…、
基子　そがん、気使わんちゃよか。
美咲　信太郎は？　もう泳いだ？　この辺って、穴場とかあんの？
留美　基子。あんたが友達とどがんしようが勝手やけど…、
基子　ずっと家におったって、する事なかもん。
美咲　夏休みなんでしょ？　一緒に海行こうよ。
信太郎　……。

☆　祥子、お酒を持って戻ってくる。

祥子　伯父ちゃん、お酒。
健一　あああああ、うん。
公達　もう座って、…ゆっくりせんね、祥子ちゃん。
祥子　そうね。
健一　呑むや？　ん？　祥子。
留美　……。
信太郎　……。
基子　よし。じゃあ、明日は朝から迎えに行くけんね、信太郎。
美咲　海行って、パールシー（？）行って、佐世保バーガー！
信太郎　……。
健一　ハウステンボスは？
基子・美咲　明後日！
祥子　…明後日は、…夏彦が帰って来るとやけんね…。

☆　一同、静まる。暗転。

☆　二〇〇八年八月十二日　午前十時過ぎ。
場面は阿部家。
祥子は仕事へ行っている。
誰もいない居間。
家の門から中庭に回り込んできたらしい信太郎が、中の様子を伺っている。
その時、だらしない格好で欠伸をしながら美咲が階段を降りてくる。
中庭で立ち尽くしてる信太郎を見つけ、美咲は大きく声を掛ける。

美咲　信太郎君！　何か用？　誰？　お姉ちゃん？　基子？
信太郎　いや、美咲さんで良かけど、
美咲　美咲って呼んで。
信太郎　え？
美咲　あ、上がれば？
信太郎　や、…いい。　すぐ済むけん。
美咲　もうねー、お姉ちゃん、お仕事で出てんだー。　基子は寝てるー。
信太郎　おい、今日は一緒に行かれんけん。
美咲　…わざわざ言いに来たの？　電話すりゃいいのに。
信太郎　番号知らんもん。
美咲　あ、そーだ。　ケー番交換しとこっか？
信太郎　……うん。
美咲　ケータイ持ってる？
信太郎　うん。
美咲　ってか、上がれば？
信太郎　…でも、
美咲　今なら大丈夫だよ。　どうせ基子しか居ないんだし。
信太郎　……。
美咲　おいで、ホラ。（手招きする）

☆　信太郎、縁側から中へ入る。

信太郎　お邪魔します。
美咲　ビールでも飲む？　あ、水着持ってきた？
信太郎　いや、そいけんが…、
美咲　どんな水着？　私、ビキニ穿く男だけはイヤよ。
信太郎　おいは、泳がんけん。
美咲　あ、はい、コレ。（携帯を信太郎に渡す）
信太郎　え？
美咲　携帯。
信太郎　うん。
美咲　登録して。
信太郎　え？　あ、でも、勝手に人の携帯ばいじったら…、
美咲　持ち主がいいって言ってんじゃん。

☆　立ち上がり台所の方へ。

美咲　その間に、ビールでも持ってきてやる。
信太郎　よかよ。 構わんでって！
美咲　だって、信太郎君に構いたいんだもん。
信太郎　……、
美咲　携帯、お願いね。（そのまま台所へ 行く）
信太郎　うん。

☆　信太郎、しばら〜美咲を視線で追い、その後、言われた通りに美咲の携帯に自分の番号を赤外線で送る。
美咲、缶ビールを二本持って戻ってくる。

美咲　ねー、信太郎君。 彼女いないの？
信太郎　え？
美咲　…いる？ いない？
信太郎　……。
美咲　ん？
信太郎　海に入るなら、酒はいかん。
美咲　こんなの、酒の内には入んないよ。
信太郎　絶対いかん。
美咲　…汗で出ちゃうよ。
信太郎　…おいは彼女なんかおらん。そがんとは興味なか！ はい、登録終わったばい！
美咲　何怒ってんの？
信太郎　今日は海には行かん！ …そがん、基子姉ちゃんに言うとって。
美咲　…泳げるんでしょ？
信太郎　…泳がん。
美咲　ふーん。 じゃあ、泳がなくていいから、肌焼きに行こうぜ。
信太郎　行かん！
美咲　……。
信太郎　……。

☆　美咲、ビールを手にして階段へ 向かう。

美咲　…じゃあ、いいよ。 誰か適当な友達いないの？
信太郎　え？
美咲　あんたの代わりに、同じクラスの男子でいいからさ。 連れて来てよ。
信太郎　…何ね、そい…。
美咲　美咲ねぇ、大声出す男って大っキライなの。
信太郎　……。
美咲　だから、別に信太郎じゃなくてもいいし。
信太郎　……。
美咲　あ、そうだ！ じゃあさぁ、―ＰＯＤの使い方知らない？
信太郎　え？ あ、…知っとるけど。
美咲　え？ マジ？ じゃあ、ちょっと使い方教えてよ。
信太郎　…よかけど、あいはパソコンがないと、
美咲　パソコン？

信太郎　そいに、自分のパソコン以外でデータば入れたら、元のデータの消えてしまうよ。
そいでもよかとぉ？
美咲　さぁ？　いいんじゃない？
信太郎　…いや、美咲さんのとやろう？
美咲　何か解んないけど、新しい曲に変えたいの。
信太郎　んじゃ、パソコン、
美咲　持ってる訳ないじゃん。
信太郎　…だいも持たっさんやろうか？
美咲　信太郎は持ってないの？
信太郎　家にあるけど。
美咲　じゃあ、信太郎の家に行こうよ。
信太郎　や、そいはちょっと。
美咲　…ってか、何をやるの？　パソコンでどうするの？
信太郎　そいけん、データばパソコンから入れるやろ？
美咲　……ムカつく。
信太郎　え？
美咲　何、訳のわかんない事言ってんのよ。
信太郎　え？　何ね？　説明しよるとやろ？
美咲　ふーん。　パソコンでデータをねぇ…。
信太郎　何ね、ソッチが聞いたっちゃろ？
美咲　何か、田舎の子って、もっと扱いやすいのかと思った…、
信太郎　どがん意味ね？　大体、ーPODの使い方くらい、どこの人でも知っとると思うけど？
美咲　坊主頭で、ジャージばっかりだと思ってた。
信太郎　そがんと、…そりゃ、野球部は坊主でジャージばい。
美咲　生意気に、ズボンずらして穿いちゃってさぁ。
信太郎　か、関係なかやろ！
美咲　東京のお姉さんにーPODの使い方を説明するなんてさぁ。
信太郎　そっちこそ、使えんとやったら買わんぎんよかたい。
美咲　…美咲ねぇ、自分のお金で物を買った事なんかないもーん。
信太郎　何ね、そい…。
美咲　いっつも買ってもらうばっかりだもーん。
信太郎　そうやろうね。　携帯もオトコの名前ばっかりやったもんね。
美咲　…見たの？
信太郎　だって、登録してって言うたたい。
美咲　登録しろって言ったけど、見ていいって言ってない。
信太郎　……。
美咲　……。
信太郎　……ごめんなさい。
美咲　……。
信太郎　……。

☆　しばらく、居間と階段で二人見合う。

美咲　…信太郎君。

信太郎　……何？
美咲　彼女作んないの？
信太郎　…そがんとは、…興味なかもん。
美咲　うそ。
信太郎　ホントばい。
美咲　だって、じゃあ、他に何に興味あんの？　クラスにかわいい子くらいいるでしょ。
信太郎　…おらん。
美咲　またまたぁ。
信太郎　…同級生になんか興味なかもん。
美咲　海行ってさ、クラスの子の水着姿でも見掛けてみぃ？　そりゃ、萌えるよ。
信太郎　美咲さんって…、
美咲　何？
信太郎　や…、あの、
美咲　勿体無いなぁ。　せっかくピチピチのやり盛りなのに。
信太郎　さか、盛っとらん！
美咲　信太郎君、コッチおいで。（手招き）
信太郎　……。
美咲　ホラ、おいで。
信太郎　……。（階段に近付く）

☆　美咲、立ち上がり、上着のファスナーを下ろす。　美咲の露わになったブラジャーが信太郎の目に飛び込んでくる。

信太郎　美咲さん…！
美咲　練習練習。　こんなの水着と変わんないよ。
信太郎　そがん…、
美咲　…携帯登録してくれたお礼。　いいよ、触って。

☆　美咲、信太郎の手を取って自分の胸に当てる。

信太郎　……。（動けない。）
美咲　…よかった。　信太郎君がイイ子で。
信太郎　……。（あまりの事に、階段に膝を付く）
美咲　怖い子じゃなくて良かった。
信太郎　……。
美咲　さっきは、大っキライって言ってごめんね？
信太郎　や、そいは、おいも…、おっきな声ば…出したけん…、
美咲　じゃあ、今からは優しくしてくれる？
信太郎　……。（まだ動けない）
美咲　イヤ？
信太郎　……。
美咲　私には興味ある？
信太郎　…う（まだ動けない）
美咲　―ＰＯＤの使い方、教えてくれる？
信太郎　…うん。

美咲　じゃあ、もっとお礼してあげる。
信太郎　……でも、
美咲　…だから泳ぐのも教えて。
信太郎　……海は…、
美咲　イイ子だね、信太郎は。

☆　美咲、身を屈めて信太郎にキスをしようとする。同時に階段の上から基子の声。
基子は二階の階段の最上段にいる。美咲の姿は見えているが、信太郎の姿は見えていない。

基子（声のみ）　何しよる？
美咲　あ、おはよー、基子。

☆　美咲、慌てて上着のファスナーを上げる。同時に、信太郎、慌てて居間へ戻る。

基子　だいかおると？
美咲　信太郎。

☆　基子、ラフなジャージ姿で、ドスドスと階段を降り、美咲の後ろを通過して
一階まで降りてくる。

信太郎　おはよー。
基子　おう。もう来たとか？
美咲　もうって。もう十時回ってんですけど。
基子　うそーん。（テーブルの上のメモを取り上げて黙読する。）
信太郎　あのね、基子姉ちゃん。おいね、
美咲　信太郎さあ、水着忘れたんだってよぉ。
基子　えぇ？　お前、全裸？　全裸で？
信太郎　や、おいは、
基子　コラ、だいが朝からビールば飲みよっとか！
美咲　早く行こうよ、海！　早くー！
基子　待たんね。飯食ってから。…お前（美咲）は？
美咲　ご飯？
基子　信太郎も食うや？
信太郎　え？　いやぁ、そがん、
美咲　どっしよっかな？　お姉ちゃんの手作りい？
基子　（もう一度メモを見て）ご飯とお味噌汁と、冷蔵庫に漬物が…、

☆　基子、台所へ歩いてゆく。

美咲　ご飯もだけどさ、信太郎、全裸で泳ぐってよ。
信太郎　おいは泳がんって言いよるたい。
基子（声のみ）　海パンなら、二階にあるばい。
美咲　え？　二階？　え？　基子の？（笑）
基子（声のみ）　兄ちゃんとさ。ちょっと待っとき、飯食ったら持って来るけん。
美咲　いいよ、二階でしょ？　見てくる。

信太郎　あ、ダメって、美咲さん！
美咲　美咲でいいよ。信太郎。（二階へ 行こうとして、そっと信太郎に耳打ち）
　お礼の続きは今度ね。
信太郎　な…！

☆ 美咲、鼻歌交じりに二階へ。 信太郎、一人居間に残る。
　そして、どうしようもなさそうに俯く。

　基子、静まり返った居間を不審に思い、引き返してくる。
　そして、へたり込むように座っている信太郎を見る。

基子　…どがんした？
信太郎　…基子姉ちゃん…。 トイレ、…借りてよか？
基子　ああ。 よかけど。 場所は知っとるやろ？
信太郎　うん。

☆ 信太郎、何かを隠すようにコソコソとトイレへ 向かう。
　基子、更に不審がって信太郎を見るが、二階から美咲が降りてくる足音を聞き、
　すぐにそちらに視線を向ける。

基子　勝手に兄ちゃんの部屋に入るなよ。
美咲　あ、ごめん。 もう入っちゃった。（手に海パンを持っている。）
基子　うわ。 よお、見付かったねぇ。 懐かしさ、それ。
美咲　イカシテルよね。
基子　それ、信太郎に刷かせるの？
美咲　うん。 ホラ、信太郎、刷いてみて。（言いながら居間を覗く。 信太郎は居ない。）
　逃げた？
基子　トイレ。
美咲　あ、っそ。
基子　けどねぇ、…信太郎…、連れて行っていいもんやろうかねぇ。
美咲　えー？ 基子と二人じゃツマンナイよ。
基子　何だと？
美咲　信太郎、もう高校生でしょ？ そんなに家が厳しいの？
基子　ってか、…海は…、
美咲　何で？ 体毛がすごいの？
基子　いや、ウチの兄ちゃんが死んだの、溺れてる信太郎を助けたからなんだよね。
美咲　え？ そうなの？
基子　うーん。 まぁ、そうなんよねぇ。
美咲　そうなんだ…。 色々と複雑なんだね。
基子　ウチはよかけど、…まぁ、姉ちゃん達がねぇ。
美咲　あー、だから昨日、海に行くって言った時に、変な空気になったのか。
基子　そうやんね。 多分、バレたらうるさいよ。
美咲　そっかぁ。 なるほどねぇ…。
基子　ウチですら、ちょっと引いたもんね、昨日の空気。
美咲　でもさぁ 信太郎が泳いじゃいけないって事にはならないでしょ？

基子　普通は、…やっぱ、気ぃ使うやろ。
美咲　…そうだね。まぁ、基子にしてみれば、お兄ちゃんの事だしね。
基子　いや、ウチはさ、そりゃ、もう五年も前の話やし？　いつまでも気にはしてないけど。
美咲　…コッソリ行けば大丈夫じゃない？　私達とだけなら、信太郎も気ぃ使わなくていいじゃん。
基子　ウチは構わんけど。
美咲　私も部外者だから、関係ないし。
基子　…ま、そうね。…五年も経っとるとやしね。いつまでもウジウジしてたらつまらんけんね。
美咲　あ、ねぇ、お姉ちゃんに話したの？
基子　ん？
美咲　コッチ帰ってくるって話。
基子　いや、まだ。
美咲　早く言ってあげれば？　お姉ちゃん喜ぶんじゃない？
基子　昨日、呑んでる時にでもトサクサで言おうと思ったけど…。
美咲　……。
基子　……。
美咲　ん？
基子　何か言い辛い。
美咲　隠しとく事でもないと思うけど。
基子　…なんて言うか、久々に会うと…窮屈感？　あの口うるさい感じ？
美咲　ははははは。
基子　芽生える、一抹の不安？
美咲　けど、離れてると心配なんでしょ？
基子　別に、
美咲　だって、あのプールの事件の時も、すんごい心配してたじゃん。
基子　あいは、そりゃ、だって、心配するやろ。いきなり佐世保市ってニュースで流れるっちゃもん。
美咲　私としては、基子が東京に残ってくれた方がいいけど。
基子　うーん。…生活さえしていければねぇ。
美咲　…そうだねぇ。
基子　…ま、まだ…もう少し考えれてみて…、

☆　信太郎、頼りない顔つきで戻ってくる。

信太郎　あ、…トイレ…、ありがとう。
基子　…どがんしたと？　お前？
信太郎　ううん。（美咲を発見し、慌てた様子で）おい、帰るけん。
美咲　ダメ！　一緒に海に行くの！
信太郎　や、だけん、おいは…、
美咲　教えてくれるって言ったじゃん。
信太郎　や、あの、
美咲　一緒に行くよね？　信太郎。
信太郎　美咲さん。
美咲　美咲って呼んで、信太郎。
基子　コラ、お前。

美咲　だって、泳ぎ教えてくれるって言ったんだよ。
基子　え？　ホントや？　信太郎？
信太郎　や、
美咲　お礼は先払いしたし。　ね？
信太郎　……。（硬直）
基子　お礼？
美咲　さ！　ご飯食べて海へＧＯ！（水着を持った手を掲げる。）

☆　美咲、他の二人のノリが悪いのにイラつき、同じポーズを強要する。

美咲　ＧＯ！
基子　…はいはい。　ゴー！（適当にポーズを取る）
美咲　ホラ、信太郎！　ＧＯ！（ポーズを促す）
信太郎　ご、ごぉー。（仕方なく右手を掲げる。）
美咲　よし！　行くぞ！　白樺海水浴場！
基子　…白浜海水浴場ばい。
美咲　…浜なのね…？

☆　暗転。

☆　二〇〇八年八月十三日　午後九時過ぎ。
場面は阿部家。
基子と美咲はハウステンボスへ出掛けている。
縁側に洗濯籠が置いてあり、廊下の奥から話し声がする。
どうやら留美と陽平が尋ねてきたらしい。
留美が先頭で、三人、居間へやって来る。

留美　…そう言えば、基子は？
祥子　久々の故郷ば満喫しよるとやろう。
陽平　ハウステンボスでしょ？　行くって言ってましたもんね。
留美　……。（奥の部屋を見ている。）
祥子　あ、夏彦に線香上げとく？
留美　うん。（そう言いながら、奥へ足が進まない。）
祥子　…入ってよかとよ？
留美　あぁ、うん。
陽平　あ、じゃあ、俺も一緒に…。

☆　留美と陽平、奥の部屋へ。
祥子は、お茶の準備をする為に台所へ。
しばらくして、りんの音が響く。
更にしばらくして、祥子は台所からお茶を持って戻ってくる。
同時に、陽平が奥の部屋から出てくる。

陽平　すいません。俺…、直接知らないのに。
祥子　何で？　賑やかな方が、夏彦も好いとるけん。
陽平　……。
祥子　座って？　お茶でも飲んでってくださいよ。
陽平　…留美ちゃん、…連れて行ったら寂しいでしょ？
祥子　……でも、置いて行けんでしょ？
陽平　や、ま、そりゃ、もう。

☆　留美が奥の部屋から出てくる。

留美　ふぇー、あの夏彦の顔！　憎ったらしか事しか思い出せん！
祥子　ありがとうね、わざわざ。
留美　なんね。改まって。
祥子　お茶、飲んでって。
留美　おう。
陽平　じゃ、ご馳走になります。
祥子　あ、…留美ちゃん、コレ（煙草を吸うジェスチャー）は？
留美　…う。それは…、それは…。
陽平　禁煙。
留美　うううう。けど、こいで吸い納め！　もう吸わんけん！
陽平　そもそも、なんで煙草を持ち歩いてんの？
留美　祥子ちゃん！　ごめん！　灰皿ば！

祥子　この『吸い収め』って言うとに、いつも騙されるっちゃんね。（台所へ）
留美　実家でも吸われんやったし、もぉ、…もぉ、ホント、こいで吸い納め！
陽平　俺は止めたのに。
留美　そうさねぇ。やっぱ止めんばよねぇ。
陽平　止めようよ。そんで、その分貯金して、車はワゴン車がいいでしょ？
留美　そがん、ワゴン車に乗せんばほどでかか子は産まん。その分、先の教育費とかもっと、建設的なことに使おうよ。

☆　祥子、灰皿を持って戻ってくる。

祥子　留美ちゃん、食器棚に直しとったろ？
留美　あ、ごめん。一応、隠しとったつもりやったとけど。
陽平　高校生じゃないんだから、隠れて煙草なんか吸って。
留美　だってさぁ、お父さんに見付かったら、マジ怒られるけん。
陽平　俺も怒るよ。
祥子　無事、丈夫な子ば産まんばけんね。
陽平　絶対、女の子ですよ。
留美　違う、男の子ばい。そんで野球ばさせるっちゃん。甲子園に行かせるっちゃん。
陽平　また！無理だよ。甲子園なんか行けません！
留美　なんが無理とね？この子の未来は光り輝いとっとよ！わが子が甲子園に行くとばい？
陽平　あんた、そいでもパパね？
祥子　何で、そんなありもしない話で怒んの？
陽平　あはははは。もう、こいは無理やね。留美ちゃんは昔っからこがん言いよったけん。こりゃ
祥子　甲子園に行くばい。
陽平　えー？何か金かかりそうだな。
留美　奨学金で行くさ。
陽平　奨学金は問題になったでしょ。
祥子　まさに、今は毎日テレビにかじりついとるやろ？
留美　そぉさ！息子の未来の姿やけんね！やっぱり、ウチの息子が一番かっこよか！
祥子　エースばい。エース！
陽平　ついでやけん、それこそ野球チーム作れるごと、毎年産めば？
留美　いや、毎年は、俺が無理ですよ。
祥子　大体、夏彦がさぁ…、
留美　……え？
祥子　あ、や、夏彦が、よう言いよったたい。おいは甲子園に行くって。
留美　ああ、ラグビーで花園に行くっても言いよったけどねぇ。
陽平　多分、あいに感化されてしもうたとやんね。
祥子　へぇ。スポーツ万能系？
留美　いや、口で言うばっかりやったけど。
陽平　けど、高校時代は野球部やったとばい。
祥子　へぇ。
留美　って言うてもねぇ。別に強豪って訳でもなかし。途中から釣りにハマッてさ。
陽平　ああ、釣りねぇ。ってか、カヤックにもはまっとったよね。
祥子　すごいね。
　　ホント、何であがん騒々しかったっちゃろうかね。

留美　……祥子ちゃん。
祥子　え？
留美　…何かあったら、いつでもウチの親に言いよ？
祥子　あ、はは、何ね、急に。
留美　祥子ちゃんも、絶対幸せになって。
祥子　……ありがとう。
留美　ウチの親も、本当に祥子ちゃんや基子ば、自分の子供のごと思っとるよ。
祥子　うん。…あはは、何か、気恥ずかしかね。
留美　ウチ、まさか佐世保から出るって思わんやったけん。
陽平　…ホント、すいません。俺が連れて行ってしまうから。
祥子　いやいやいや、そがん。そがん事は伯父ちゃんと小母ちゃんに言わんね。
留美　ね、公達っちゃんとは、どがんね？
祥子　え？　どがんって？
留美　いや、解っとると。こがん事聞くとはあいやけど、…でも、今年は来とらしたし、
　…まだ、連絡取り合いよっとやろ？
祥子　あの人は、去年は来られんやったけど、一昨年も来らしたとよ。
留美　うん。知っとるけど。
祥子　夏彦とは兄弟みたいなもんやったけんね。
留美　だけん、祥子ちゃんはどがんとね？
陽平　留美ちゃん、…そういう事は、ホラ、周りがね、
留美　でもお、だって、ウチは、もうすぐおらんごとなるけん、
祥子　ありがとう。解っとるとよ。解っとる。
陽平　こういうのは縁だから…。…ね？
留美　…でも、公達っちゃんやったら、…夏彦も安心すると思う。
祥子　……。
留美　……。
祥子　何かよか話でもあったら、すぐ留美ちゃんに連絡するけん。
留美　…ホント？
祥子　うん。ありがとう。
留美　絶対、連絡してよ？　出来れば早めに！
祥子　…うん。
留美　……。
祥子　留美ちゃんは、一足先に幸せになってね。
留美　…うん。
陽平　俺が幸せにします。

☆　しばらく沈黙。

祥子　おー！
留美　言うたね！
陽平　何？　本当に幸せにするって！
祥子　うん。留美ちゃんを宜しく。
陽平　はい。
留美　まー、どこまで本気か解らんけんね、この人。
陽平　何言ってんの、今更！

祥子　何ね、結局ノロケに来たとね、留美ちゃん。
留美　とんでもなか！　ウチだって、初めて聞いたよ。
陽平　いや、…ちゃんと決意表明しておこうかと思って。
留美　へぇぇ。
祥子　じゃあ、あとはもう、丈夫な子を産むだけたい。
陽平　そうですね。
祥子　そんで、甲子園で活躍してもらわんばもんね。
留美　でもね、ホントは、健康なら何ちゃよか。
祥子　……。
留美　何でも、なりたかモンになればよか。　コメディアンでも、歌手でも、
　　…この際、サッカーでも、ラグビーでも何でも…。
祥子　そうやね。
留美　…こん子、…男の子やったら夏彦って付けてよか？
祥子　え？
陽平　……。
留美　…嫌やったら、…やめとくけど。
祥子　嫌じゃなかけど…、あがん…、夏彦のごとなったらどがんすると？
留美　夏彦のごとなって欲しか。
祥子　……。
留美　何か、元気な子になりそうたい。
祥子　まぁ、そいは保証するけど。
留美　…夏彦もいいってさ。　そがんせろって。
祥子　……。
留美　よし。　そうしよう！
祥子　陽平ちゃんは？　そいでよかと？
陽平　留美ちゃんがそうしたんだったら、俺は…。
祥子　…ありがとうね、二人とも。
留美　何ね、祥子ちゃん、そがん…、
祥子　留美ちゃんは、昔から、夏彦の味方やったもんね。
留美　……。
陽平　…俺、夏彦さんには負けませんよ。
祥子　え？
留美　うわー！　あんた、何ば言いよるとね！（陽平を叩く）や、何でんなかよ、祥子ちゃん！
祥子　でも、『甲島夏彦』って…語呂悪くない？
留美　…ホントね…。　…ってか、中島って言う苗字がね。
陽平　うわ。　何てこと言うの？　しかも、ホントに今更！
留美　けど、夏彦ってつけると！　もう決めたと！
陽平　はいはい。
祥子　陽平ちゃん、尻に敷かれすぎよ。
陽平　え？　そうですか？
留美　そがん事なか。
陽平　はい。
祥子　あ、そうだ。　お菓子あるよ、お菓子。　食べて行かん？（立ち上がりかける）
留美　や、よかよ、祥子ちゃん。
祥子　けど、ウチじゃだいも食べんけん、

留美　そいより、もう一つ、聞いて欲しかとけど…。
祥子　え？　何？（座りなおす）
留美　もう、あの二人は呼ばんっちゃよかっちゃなか？
祥子　…え？
留美　今里姉弟さ。
祥子　ああ、
留美　正直、あの二人は好かん。
祥子　留美ちゃん。
留美　だって、ウチもおらんごとなるとに。　来年もその次も、あの人たちが我が物顔で上がり込んで夏彦ば参るっちゃろ？　ウチは嫌やもん！
祥子　向こうの気の済ますまでって思いよるとけど、
留美　祥子ちゃんは知らんとさ。　愛実ちゃんは夏彦ば利用して、自分のよかごと付き合いよったとやけん。
祥子　え、留美ちゃん、知っとったと？
留美　祥子ちゃん、知っとったと？

☆　沈黙。

留美　祥子ちゃん、だいに聞いたと？
祥子　留美ちゃんは？
留美　ウチは夏彦に。
祥子　ウチも、夏彦に。
留美　知っとるとなら、何で、あがん、愛実ちゃんはこの家に来いきらすと？
祥子　や、あの、ウチは、夏彦からは聞いたけど、…愛実とはそがん話はした事なかし。
留美　じゃあ言うてやらんね！
祥子　別に、愛実と夏彦が付き合いよったけんって、夏彦ば参らんでって理由にはならんたい。
留美　違うさ！　あん人は、高校の時から悪か男と付き合ったり、教師と出来とってみたり、
祥子　そいは、夏彦とは関係なかたい。　夏彦と付き合う前の話やろう？
留美　だけん夏彦は、あの女に同情して付き合いよっただけさ！
陽平　留美ちゃん！
留美　あの女は昔っから、男の気ば引くとがうまかったと。　夏彦は優しかったけん、愛実ちゃんに相談されて、上手い事利用されよっただけさ。
祥子　そいけど、…夏彦は好きで付き合いよったっちゃろうけん…。
留美　結局は、…あの女の弟ば助けて、夏彦が死んでしまったったい！

☆　留美、泣き崩れる。　陽平が留美を支える。

祥子　留美ちゃん…。
陽平　すみません。
祥子　え？
陽平　留美ちゃんは、ずっと、悩んでたみたいで…。
留美　だって、…夏彦は…、おいが付いとってやらんば、愛実が可哀想かって…。
祥子　……。
陽平　ずっと、…祥子さんに言いたかったんだと思います。　でも、留美ちゃんは俺が幸せにします。　…もう、夏彦さんの事では悩まないで欲しいから。

祥子　……。
陽平　ね、留美ちゃん。（テーブルの下のティッシュの箱を留美に差し出す）
留美　うおおおお。（ティッシュを何枚も取る）ごめんね、祥子ちゃん。
祥子　大丈夫ね、留美ちゃん。
留美　…そがん、…ひどく言うつもりじゃなかったとけど…。（ティッシュで涙を拭う）
祥子　…夏彦は、…留美ちゃんには話しとったとね…。
留美　…もっと、ちゃんと止めればよかった…。
祥子　留美ちゃん、ごめんね。
留美　いや、祥子ちゃんが謝ることじゃなか。ウチが勝手に…、
祥子　愛実の事も…、ずっと、留美ちゃんには嫌な思いばさせとったとね。
留美　だって、あの女、しれっとした顔してさ。毎年毎年、当たり前のごと来るし。
　しかも、あの弟も根暗やし。あいじゃ、夏彦が助けた甲斐もなか！
陽平　けど、向こうも辛いと思うよ。
留美　はっ。祥子ちゃんには黙って、コソコソ付き合いよったくせに。
祥子　ウチも、そりゃ、気まずかし。ぶっちゃげ、来んちゃよかとは思うけど。
留美　もう八ッキリ言ってやり！…ウチが引っ越す前に言うてやろうか？
祥子　や、それは、大丈夫。留美ちゃんがそがん嫌とやったら、ウチがきちんと話ばするよ。
留美　ホント？
祥子　…うん。
陽平　…でも、祥子さんにも立場があるだろうから、
祥子　いや、…そうよね。いつまでも続けよったら、お互いによくなかもんね。
留美　ってか、アイツはどうでもよかっさ！ウチは、祥子ちゃんが良ければよかと！
祥子　うん。…ありがとう。

☆　外から車のクラクションの音。

留美　ゴメンね、祥子ちゃん。ウチが近くに居れるとやったら、…こがん事は言わんつもりやったとよ。…そいけど…、

☆　もう一度、クラクションの音。

留美　（玄関の方へ向かって）何ね、やぐらしか！
陽平　多分、ウチの車じゃない？
留美　あ、
祥子　何ね、ウチの駐車場に入れてよかったとに。
留美　や、すぐ帰るつもりで、路駐してきたとやった。
陽平　ちょっと、先に出てかわしてくるね。（玄関へ）
留美　あ、じゃあ、車で待っとって。ウチもすぐ行くけん。
陽平　わかった。あ、じゃあ、お邪魔しました。あの、また、横須賀に戻る時は挨拶に来ますから！（そのまま玄関へ消える）
祥子　あ、はい。どうもありがとう。
留美　そっか、そっか。ウチの車か…。
祥子　…良か人ね、陽平ちゃん。
留美　…まぁな。
祥子　よかったね、留美ちゃん。

留美　……祥子ちゃんも、自分の幸せば考えてよかと思う。
祥子　ウチは…今でも幸せばい。
留美　早う、夏彦ば安心させてやって。

☆　二人、見つめ合い、抱き合う。

留美　あーん、ごめんね、祥子ちゃん！　ウチ、ひどか事ばっかり言って！
祥子　ううん。　こがんウチの事ば思ってくれるとは留美ちゃんだけばい。
留美　出来たら、一緒に連れて行きたかくらいばい！
祥子　それは出来ん！　陽平ちゃんに恨まれるもん！
留美　横須賀って何やー！
祥子　けど、…置いていかれたら寂しかやろ？
留美　……。
祥子　寂しかとやろうもん。
留美　…そいは、答えられん！
祥子　何ね、それ。

☆　祥子、留美から離れ、床に置いてある留美のバッグを拾う。

留美　…また、顔ば出すけん。
祥子　見送りに行くよ。（バッグを渡す）
留美　うん。
祥子　留美ちゃん、アレ（煙草）どうする？
留美　ああ、祥子ちゃんにやる。
祥子　要らんよ。
留美　本気で禁煙せんば、夏彦ば産まれんもん。
祥子　…そうばい。　頑張って、夏彦ば産んでくれ。
留美　アイツの事やけん、腹ば蹴破って出てきそうよね。

☆　二人、笑い合いながら玄関へ。

留美　ホントに、ごめんね、祥子ちゃん。
祥子　ううん。
留美　ああ、よかよ。　何かしよったっちゃろ？
祥子　ああ、洗濯ばね。
留美　こがん夜に？
祥子　基子さんの部屋から、丸まって濡れたタオルや水着が発見されましてね。
留美　あはははは。　アイツ、最低やね。
祥子　なんで洗濯機に入れるって事ができんとかね。
留美　帰ったら言ってやれ。
祥子　そのつもりです。
留美　あはは。　んじゃね。　また。
祥子　うん。　気を付けてね。　陽平ちゃんにヨロシクね。
留美　あーい。　おやすみ、祥子ちゃん。

☆　玄関の閉まる音。　しばらくして、祥子が居間へ戻る。
しばらく、座り込んでボーっとしている祥子。
そして、不意に回路が繋がったように、洗濯籠へ向かう。
洗濯物を解しながら、仕方なさそうにタオルを一枚引きずり出す。
その洗濯物の中に、男物の海パンが混ざっている。
それをマジマジと見る祥子。
何かを思い立ったように、居間から二階へ走って行く。

しばらく無人。
そこへ、基子と美咲が帰ってくる。
玄関から二人の声。

基子　　ただいやー。
美咲　　ただいまー！
基子　　姉ちゃん！　姉ちゃん！

☆　基子と美咲、居間へ。

基子　　あれ？　姉ちゃん？
美咲　　（座り込んで）あー、疲れたぁ！
基子　　姉ちゃん、オミヤゲのあるばい！

☆　基子、テーブルに準備してある食器を見て、

基子　　あ。

☆　基子、台所の方へ行く。
入れ替わりに祥子が階段から降りてくる。
気付かず、美咲はテーブルの上の漬物をつまむ。

基子（声のみ）　あれー？　マジ、おらん。（居間へ戻りながら）どこに…、（階段に立っている祥子に気付く）うわ！
美咲　　え？　（振り返る）
基子　　なん、ビックリするやん！
美咲　　何？　どうしたの、お姉ちゃん？
祥子　　…どこ行っとったと？
基子　　え？　いや、ハウステンボス。
祥子　　…ご飯は？
美咲　　あー！　そうだ！　お姉ちゃん、オミヤゲ！　佐世保バーガーがあるよ！
祥子　　心配してもらわんちゃ、ウチは自分でご飯作って食べれます。
基子　　そがん言い方…、
祥子　　何ね？
基子　　…いえ、何も…。
美咲　　でも、せっかくのオミヤゲなのに…。
基子　　美咲。

祥子　……ご飯要らんなら、そんぐらい連絡せんね。
基子　…ごめん。
美咲　…でも、別にみんな大人なんだから、ご飯くらい勝手に食べるじゃん。
祥子　…そうですね。
基子　いや、ごめん！　つい一人暮らしのクセの出たってゆーか、
祥子　さぞ立派に自活しようすとやろうね、基子さんは。
基子　…そがん言い方せんちゃ…、
祥子　何ね？
基子　…いえ、
美咲　こわー。

☆　しばらく沈黙。　美咲がテレビをつけようとするが、基子に止められる。

基子　姉ちゃんもコッチ来て座らんね。
祥子　…この家で、あんたに指示されとうなかよ。
基子　……。
祥子　……。
美咲　…何したのか知んないけど、早く謝りなよ、基子。
基子　お前が言うな。
美咲　何？　私客だよ？　客！
基子　お前は客じゃなか！
祥子　基子。
基子　はい。
祥子　…あんたは、いつから海パン穿くことなったと？
基子　…は？
美咲　ぶはははは。
祥子　美咲さん。
美咲　あ、美咲でいいよ。　美咲さんだとさ、『さ』が二回続くからね…、
祥子　コレはだいんと？（海パンを二人に見せる）
基子・美咲　……。
祥子　だいの？
基子　そいは、…信太郎の刷いた、その…、
美咲　だって、それがなかったら全裸で泳ぐしかなくて、
基子　そんで、アイツ、手ぶらで来たけんさ。
美咲　美咲は、別に全裸もアリって思ったよ？
祥子　……。
基子　…兄ちゃんとぼ借りたと。
祥子　…基子。
基子　よかたい！　どうせ家にあったっちゃ使わんやろうもん？
祥子　そがん問題じゃなかやろうもん。
基子　じゃあ、なんが問題ね？
祥子　よりによって、何で信太郎君に…！
基子　何ね？　信太郎が穿かんぎん、他にだいが…、
祥子　信太郎君ば、あの子ば海に誘うなんか、どがんかしとるっちゃなかとね？
基子　はぁ？　よかやろうもん！

祥子　勝手に夏彦の部屋に入って！
基子　ここは私んちですけど？
祥子　あんたは…！
美咲　あ、でも、夏彦さんの部屋に入ったのは、私。
祥子　基子、あんた、
美咲　基子は入ってないよ？　だって、やっぱ、全裸で泳がせる訳には…、
祥子　（美咲に）ちょっと黙っとってくれんね？　（基子に）あんたは、人の気持ちば何と思っとると？
基子　あー！　悪かったたい！　そいぎん、信太郎が全裸で泳げば、姉ちゃんも大満足やったっちゃろう！
祥子　うち達がどがん辛かか、あんたは解っとらんとさ！　そいけん、こがん事が平気で出来るとさ！
基子　たかが、海で泳いだだけばい！

☆　チャイムの音。三人静まる。

基子　だいか来たよ。
祥子　…あんたが出なさい。
基子　どうせ、ウチには客は来ん。
祥子　え？
基子　この家に、だいもウチなんか訪ねて来ん！
祥子　……。

☆　もう一度、チャイム。

美咲　じゃあ、私が出るよ。

☆　しばらく、祥子と基子、睨み合う。

祥子　勝手な事ばっかりしてから。
基子　悪かったたい。
祥子　…そがん勝手か事ばしたかとやったら、もう帰って来んちゃよか。
基子　……。

☆　玄関から渋い顔をして美咲が戻ってくる。
　けれど、結局、コチラの姉妹も険悪なムード。
　美咲にとっては四面楚歌である。

美咲　……。
基子　だいね？
美咲　予想外です。
基子　え？
美咲　信太郎のお姉ちゃん。
祥子　え？
基子　…何やろうか？　上がってもらい。

祥子　（階段から降りようとして）…ちょっと、何やろうか？　…どがんしよう？
基子　（美咲に）…上がってもらい。
美咲　んー…、
基子　何ね？
美咲　私の危機管理能力が訴えてるんだけどぉ、…多分、全然いい話じゃないと思うよ。
祥子　…お姉ちゃんが行って来る。
基子　…や、ウチが、
祥子　大丈夫やけん、基子はここにおりなさい。

☆　祥子、階段から降りて玄関へ向かう。

美咲　（祥子を目で追いながら）あのね、一応、上がってって言ったんだけどぉ。

☆　祥子、美咲の言葉を聞かずに、そのまま玄関へ行く。

基子　……。
美咲　大変だねぇ。
基子　ん？　や、別に。
美咲　……。
基子　でも、まぁ、…そうやね…。（その場に座り込む）
美咲　海で泳ぐのも、佐世保バーガー食べるのも…こりゃ、一苦労だわ。
基子　はは。

☆　玄関の方でひとしきり祥子と愛実の声がし、祥子の『上がって。』と言う言葉を切っ掛けに、足音がコチラに近付いてくる。　祥子が先に入ってきて、基子と美咲を交互に見る。

祥子　二人とも、座んなさい。

☆　続いて愛実が現れる。

愛実　…基子ちゃん、ちょっとよかやろうか？
基子　…はぁ。
美咲　私も関係あんの？（祥子へ問うが、祥子は答えない）　あるの？（次に愛実に問うが、愛実も答えない）……あるのね？（独り言のように）

☆　仕方なく、基子と美咲、居間へ座る。　祥子に促され、愛実も腰を降ろす。

祥子　ウチ、お茶でも…、
愛実　いや、よかと。　祥子も…ここにおって。
祥子　…うん。

☆　最後に祥子が座り、より一層重い空気に。

愛実　…大体…解ると思うけど…、
基子　はぁ。
美咲　私、全然読めてないんだけど？

美咲さん。
祥子　基子ちゃん、…あの、信太郎がお世話になっとって言うともなんやけど、
愛実　信太郎ば連れまわしたりするとは、やめてくれんやろうか？
基子　…何で？
愛実　…何でって…、解るたい。
基子　別に、信太郎は嫌がっとらんやったよ？
愛実　…けど、もう誘わんでほしかと。
基子　……。
愛実　付いて行った信太郎が一番悪かけん…、基子ちゃんには申し訳なかとけど、
美咲　別に、悪くないじゃん。
愛実　貴方は知らない事かもしれないですけど、…信太郎は…、
美咲　何で？　楽しかったよ。
基子　愛実ちゃん、あのさぁ…、
愛実　そいに、…お酒も飲ませたりしたろ？
基子・美咲　う。
祥子　あんた達、
愛実　…あの子は、自分のした事ば考えたら、海なんか入っちゃいかんとよ。
美咲　はぁ？
基子　美咲。
美咲　海に行っちゃダメ？　私らと遊んじゃダメ？　何それ？　あんたの海か？
基子　美咲、やめんね。
美咲　行くさ、海。　そりゃ、泳ぐさ。　だって、目の前にあるんだよ？　そりゃ、海パンも刷くさ。
愛実　海パン？
愛実　海パンは、この際どうでもよかけど、でも、もう良かっちゃなか？
基子　良くなかよ。　…そがん事言わんで。
愛実　信太郎、メッチャテンション高かったんだからね！　最終的に、海に潜って、ヒトデを取ったんだからね！　しかも、十個も！
美咲　ヒトデも、この際どがんちゃよかけど。
基子　すんごいノリノリで、『獲ったどー！』ってやってたし、全然嫌がってるようには見えませんでした！
美咲　もうやめて下さい！　そがん話は聞きたくなか！
愛実　……。
美咲　……。
基子　愛実。
祥子　…海に誘ったとは軽率やった。　けど、ウチは、五年前の事は事故やと思っとる。
基子　信太郎のせいなんか、思ったことなか。
美咲　だって、実際事故だったんでしょ？
祥子　もうやめんね。　その話は…。
愛実　でも、何年経っても消える事じゃなか。
祥子　基子たちも、そがん意味のあって信太郎君ば誘った訳じゃなかとやけん。
愛実　お願いけん、もう誘わんでくれるやろうか？　ウチは、あん子に大人しくしとってもらえればそいでよかと。
美咲　何、それ？
愛実　あん子が問題ば起こさんでくれれば、そいでよかと。
美咲　それってどうなの？

祥子　美咲さん。（美咲を制す）…愛実、ちょっと聞いてもらってよかね？
愛実　……。
祥子　そがん辛かとやったら、もう命日にも来んちゃよかよ。
愛実　え…？
祥子　もっと早うそがんすれば良かった。いつまでもこがん状態ば続けよったっちゃ、お互いにようなかもん。
愛実　…もう夏彦ば参るなって言う意味ね？
基子　何でそがんなるとね、愛実ちゃん。
祥子　そがん思ってくれてよかよ。
基子　姉ちゃん。
祥子　信太郎君にも、そがん言うとって。
愛実　…考えてみれば、そうたいね。うちたちが手ば合わせに来るとがおかしかとやもんね。
祥子　……。
基子　そがん、よっぽど偉か仏（ほとけ）さんならけど、兄ちゃんばい？　皆、仲良かったたいね。
姉ちゃんも兄ちゃんも愛実ちゃんも信太郎も、仲良かったたいね！
たった一人おらんごとなっただけで、何でこがんなっとると？
祥子　でも、おらんごとなったとは、夏彦ばい…。
基子　けど、
祥子　…しょんなかたいね。こがんなってしもうたとやもん。
愛実　…じゃあ、もう、ウチ達は来んごとするけん。（立ち上がる）
祥子　…うん。
愛実　信太郎にも言うとく。
美咲　え？　だって、信太郎は明日も一緒に遊ぶんだもん！
基子　そうばい。
祥子　信太郎君も、もう関わらん方がよか。思い出せば辛かだけやけん。
美咲　だから、信太郎は楽しそうだったってば！
愛実　今まで、本当にすみませんでした。
基子　…何でこがんなるとね…。
愛実　最後に、夏彦ば参ってよかやろか？
祥子　うん…。今日は、帰って来とるけん。

☆　愛実、仏間へ行きかけるが、基子が行く手を遮る。

基子　ちょっと待たんね。
愛実　基子ちゃん。
基子　こがんとおかしか。いや、兄ちゃんが喜ばん。
愛実　……。
基子　兄ちゃんは賑やかかとが好きやったたい！　こがん別れ方ばしたっちゃ、喜ばっさんよ！
愛実　でも、
基子　明日にせんね、愛実ちゃん！
愛実　え？
基子　明日の晩にさ、宴会しようで。
祥子　何が宴会ね…。
基子　だって、兄ちゃんの事で愛実ちゃん達が来るとは最後になるっちゃろ？

愛実　……。
祥子　……。
基子　終わるなら、ちゃんと終わりにしようで。　別にパーッと最後にしても良かっちゃろ？
祥子　パーッとって。
基子　そいけん、なんて言うか、明日で一旦区切りって事でさ。　ウチと美咲も東京に帰るし、
　　パーッと宴会してさ。　ちょうど信太郎も誘おうって言いよったし。
美咲　そうそう。　最初の日も宴会だったじゃん。
祥子　あいは、夏彦の命日やったと。
美咲　最後の日も騒ごうって決まったの。
祥子　ウチは初耳やけど。
愛実　でも、うち達は来る訳にはいかん。
基子　そがん堅苦しか事じゃなくて、このメンバーでよかたい。
美咲　プラス、信太郎で。
基子　ね？　その方がよかって。　信太郎だって、最後に明るく兄ちゃんば参った方がよかって。
祥子　…パーッとほともかく…、区切りにはなるかもしれんね。
基子　そうやろ？
愛実　そがん、…祥子はよかとね？
祥子　そりゃ、ウチだって、後味の悪かよりはそっちの方がよかよ。
基子　六時くらいやったら、準備も出来とるやろうし。
祥子　…言うたからには、自分で準備しなさいよ。
基子　姉ちゃんも腕ば振るうやろうし。
祥子　あんたは、

☆　気まずい沈黙。

祥子　…そがんせんね、愛実。
愛実　……。
祥子　そいでもう終わりにしよう。
基子　もー、姉ちゃんが口開いたら辛気臭かっちゃん。
祥子　悪かったね。
愛実　じゃあ、六時頃、…信太郎と来るけん。
祥子　うん。
基子　待っとるけん。

☆　またも、気まずい沈黙。

愛実　…今日は、本当に、こがん遅くに…、
祥子　いや、こん子達も悪かとやけん。

☆　愛実、玄関の方へ 向かい、一度入り口で立ち止まる。　そして、居間を向いて頭を下げる。

愛実　お邪魔しました。
☆　愛実、そのまま玄関へ。　祥子も二人を見送る為に玄関へ。
　基子も付いて行こうとするが、祥子に止められ居間に残る。

美咲　あー、怖かった。
基子　……。
美咲　祥子お姉ちゃんは解るんだけどさ、愛実ちゃん、ちょっと異常じゃない？
基子　何が？
美咲　だってさぁ、いくらなんでも、自分の弟だよ？　あんな言い方する？
基子　愛実ちゃん、兄ちゃんとも仲良かったけんね。
美咲　けど、信太郎は弟だよ。　変だよ、あんなん。
基子　…やっぱ、五年のブランクってハンパねぇ。
美咲　何か、ニッポン昔話に出てくるよね、ああいうの。
基子　は？
美咲　ヤマンバっての？　何か、怖い女が出てくるじゃん。
基子　お前ねぇ。
美咲　だって怖いんだもん、あの二人。
基子　そいでも、…親友同士やったとよ。　あの二人は…。
美咲　…ふーん　（漬物をつまむ。）

☆　祥子が玄関から戻る気配を察して、基子、廊下に視線を投げる。

基子　…メシ、ある？
祥子　食べて来たとやろ？
基子　何か、…腹の減ったっさ。
祥子　…ホントに、あんたは…。　何で次から次にこがん騒ぎば起こすと？
美咲　でも…、基子も間違ってないと思う。
祥子　……。
基子　腹の減ったけん。（立ち上がる）　何か食うよ。（台所へ行きかける）
祥子　待たんね、基子。
基子　もー、やぐらしか！
祥子　何がやぐらしかね！
基子　そがん、グチグチ言わんちゃよかたい。（台所へ）
祥子　まだ何も言うとらんやろうもん。
基子（声のみ）　言いそうな顔しとるもん。
祥子　……。

☆　祥子、居間へ目を向ける。　美咲と目が合う。

美咲　ねー、お姉ちゃん。
祥子　美咲さん。
美咲　何？　どうぞ？
祥子　いや、…美咲さんからどうぞ。
美咲　いや、座れば？って言おうと思っただけだから、お姉ちゃんがどうぞ。
祥子　……あのね。（座りながら）　あんまり色々言いたくなかとけど…。
美咲　うん。　…美咲もちょっとは反省してる。
祥子　……。
美咲　お姉ちゃんも、愛実ちゃんも信太郎も、寂しいんでしょ？
祥子　……。

美咲　お姉ちゃんが一番寂しいんでしょ？　夏彦さんも基子も居なくなって。
祥子　……そうね…。
美咲　ねー、知ってる？　信太郎ってすんごいバカなんだよ。
　ここではさぁ、猫かぶって『ぽぁ』とか『ぽい』とか言ってるけど、
　今日もねぇ、ハウステンボスでさぁ、暑いのに、妙にテンション上がっちゃって。
　『っからっここまでは俺の道ばい』って、バカみたいに威張って歩いてんの。
祥子　……。
美咲　バカだけど、…笑ってる信太郎も悪くはなかったよ。
祥子　そりゃ、ウチだって…、信太郎君は元気な方がよかよ。
美咲　これじゃ、基子も可哀相だよ。
祥子　…展望台行った？
美咲　え？
祥子　上にあるやろ、展望台。　昔ね、まだ夏彦が小学生の頃、家族で行った事のあるっちゃん。
美咲　そこの動物園からコッチに降りたところ？
祥子　そう。　あそこから九十九島ば見よった。　夕方で、本当に綺麗でね、夏彦も基子も、
　喜んどった。
美咲　うん。　…綺麗だったよ。
祥子　夏彦があそこから見える島ば指差して、『あそこからっここまではおいの島ばい』って。
　そしたら、基子も真似して、『じゃあ、コッチから向こうまではウチの島』って。
美咲　ははは。
祥子　そしたら、お父さんが『そいやったら、祥子姉ちゃんの分がなくなってしまうやろ』って
　言うたと。
美咲　……。
祥子　…何でんなか話やけど、あの展望台ば通る度に思い出すっちゃんね。
美咲　…今は、全部お姉ちゃんの分だね。
祥子　……。

☆　基子、台所から鍋を持って戻ってくる。

祥子　あんたは、…何しよっと？
基子　食うったい！
祥子　何てね？　こら、基子！

☆　基子、鍋をテーブルに置き、用意してあった箸で、鍋の中の煮物を食べる。

祥子　そいは、姉ちゃんの晩御飯ばい。
基子　姉ちゃんには佐世保バーガーのあるやろが。
美咲　あ、（包みを祥子の前にかざして）チンして食べてね。
祥子　（受け取りながら）ちゃんと皿についで食べんね。
基子　こんままでよかと！
美咲　美咲もー。（テーブルの上の箸を取る。）
祥子　ホラ、もう。　美咲さんの真似さすたいね。
基子　こっからっここまではウチの分！
美咲　はぁ？　バッカじゃない？　あんた！
祥子　…ご飯も炊いてあるとばい。

基子　……。
祥子　あんた…、ちゃんとして食べんばよ？
基子　……。
祥子　たまには、自分でご飯作って食べんばよ？
美咲　お姉ちゃん！　激ウマ！
祥子　…美咲さん、…ご飯あるけど、
美咲　あ、…食べちゃおうかなぁ。
祥子　あんたも、いるとやろう？（立ち上がり、台所へ行きかける）
基子　姉ちゃん。
祥子　何ね？
基子　……。
祥子　早う言いなさい。
基子　……何でんなか。（ひたすら煮物を食べ続ける）

☆　暗転。

☆　二〇〇八年八月十四日　午後六時前。
場面は阿部家。
美咲がテーブルを拭きながら、仏間に居る基子と話している。
一応、自分たちが言い出した宴会なので、形だけは手伝おうとしている様子。

美咲　基子さん。決断の時ですよ。
基子　……。（りんの音）
美咲　まぁ、美咲はどっちでもいいけどさ。
基子　……。（りんの音）
美咲　ねー、ホントに今日、愛実ちゃん来るかな？
基子　……。（りんの音）
美咲　いい加減鬱陶しいよ、あんた。
基子　……。（りんの音）

☆　祥子、台所から走ってくる。居間に居るのが美咲だと確認して、

祥子　（仏間に）ちんちんちんちん鳴らさんよ！

☆　祥子、言い捨てて台所へ戻る。

美咲　ぶ。
基子　…ムカつく…。
美咲　あんたがガキなんだよ。
基子　ガキでよか。

☆　基子、匍匐前進で仏間から出てくる。

美咲　パーッとやるんでしょ？
基子　うーん。
美咲　ねー、…そんなにお姉ちゃん嫌い？
基子　嫌いじゃなかよ…。
美咲　素直になれないだけ？
基子　さぁ。
美咲　東京じゃあんなに心配してたくせに、本人の前だと気が変わっちゃうの？
基子　何ね？　説教ね？
美咲　いや、そういうんじゃなくて。やっぱ離れてたら感覚違うのかなって思ってさ。
基子　そうやね…、それはあるかもしれん。
美咲　お姉ちゃんもさ、辛いんなら、こっから出ればいいのにね。
基子　……。

☆　チャイムの音。

祥子　（台所から）ちょっと、ごめん。出てくれんね。
美咲　はーい。
基子　ウチが出る。（起き上がる）

美咲　何、

☆　美咲の言葉を待たず、基子が玄関へ走っていく。

美咲　ガキ。（基子が散らかした座布団を並べ直す）

☆　玄関から、愛実、信太郎、基子が挨拶を交わす声が聞こえる。

基子　姉ちゃん。愛実ちゃんたちの来らしたよ！

祥子　はーい。

☆　台所から祥子が来る。廊下で基子、愛実、信太郎と会う。

祥子　いらっしゃい。

愛実　お邪魔します。（手土産を渡す）

祥子　あ、良かったとに。

愛実　準備しよるとやろ？　ウチも手伝うけん。

祥子　あ、そがん、大した事はしよらんとけど…、

愛実　そがん、…ご馳走にだけなるわけにはいかんけん。

祥子　じゃあ、ちょっと手伝ってもらおうかね。

☆　祥子と愛実、台所へ。残された基子、美咲、新太郎が居間に突っ立っている。

美咲　大人って大変だよねぇ。

信太郎　おいも、…手伝いに…、（台所へ行きかける）

基子　やめとき。どうせ邪魔かだけさ。

美咲　そーだよ。信太郎でかいし、ホント邪魔だよ。お姉ちゃんズに邪険にされるだけだよ。やめときなよ。ホント、邪魔だからさ。

信太郎　そがん言わんちゃ…、

基子　ホラ、座れ、信太郎。

信太郎　うん。

☆　美咲、信太郎、基子、座る。そして、何となく密やかに話し始める。

美咲　昨夜、愛実ちゃんから何か聞いた？

信太郎　…うん。ここに来るとは今日で最後って。

基子　…まぁ、そいが良かとかもしれんね。お前にとっても。

信太郎　けど、おいは、ちゃんと毎年夏彦兄ちゃんに手ば合わせたか…。

基子　別に、お前が嫌じゃなかったら、一人でも来て良かとばい。

信太郎　…けど、おいが勝手な事ばしたら、姉ちゃんが…。

基子　またぁ。ウジウジすんなよ。姉ちゃんが姉ちゃんがって、お前は。

美咲　自分だって、お姉ちゃんに頭上がんないくせに。

基子　うるせぇ。

美咲　ねー信太郎。愛実ちゃんさぁ、何かに取り憑かれてるって事ないよね？

基子　ぶは。

信太郎　何ねそい？　何でそがん事言うと？
美咲　だって、アレは尋常じゃないよ。　何か怯えてるっぽいし。
基子　責任ば感じとらすとやろう。
信太郎　そうばい。　おいのせいで、
美咲　信太郎はタベ居なかったからさぁ。　大変だったんだよ、あんたのお姉ちゃん。
あんた、まさか、毎日家であんな事言われてんじゃないよね？　虐められてない？
屋根裏部屋とかに入れられてない？
基子　みーさ。
信太郎　違うばい。　タベは、おいが海に行ったけん、あがん怒っとらしただけで、
基子　そいは、基子姉ちゃんも悪かった。
美咲　でも、あんた楽しそうだったじゃん。　ヒトデでビキニーってやってたじゃん。
信太郎　そいはそうけど…。

☆　しばらく、三人が黙る。　チャイムの音。　三人、慌てて体を離す。

祥子　（台所から）基子！　お客さん！
基子　うん。　あああ、ビックリした。（立ち上がる）

☆　基子、玄関へ。

信太郎　…おいは、姉ちゃんにも祥子姉ちゃんにも幸せになって欲しか。
美咲　……。
信太郎　…おいが、おらんごとなれば良かった。
美咲　信太郎。　もっと高校生らしい事で悩みなよぉ。

☆　美咲、信太郎を抱き寄せる。　同時に、玄関から賑やかな声が聞こえる。
訪ねてきたのは場違いな女子高生が二人。
基子、祥子に告げようとして居間の前の廊下に戻ってくる。

基子　こら、美咲。　また、お前は、手癖の悪かっちゃっけん！　何しよる？
美咲　信太郎を慰めてんの。
基子　信太郎はいかんばい。
美咲　純粋に慰めてるの。
祥子　（声のみ）だいね？
基子　（台所に向かって）　紗央里ばい。　紗央里。　でかくなっとった。　何か、ウチの倉庫ば貸してって、前から言うて来よったっちゃろ？
祥子　（声のみ）あぁ、
美咲　そんなんじゃ、夏彦さんが助けた意味ないじゃん。
信太郎　……。
祥子　（声のみ）上がってもらってもよかけど。
基子　（台所に）うん。
美咲　信太郎がこんなんじゃ、私も心配で東京に帰れないよ。
基子　離れんね。
美咲　だから、慰めてるの。
基子　よかけん。　客の来るけんね。

☆　基子、言い残して、もう一度玄関へ 向かう。

美咲　このままじゃ、本物の根暗になっちゃうよ？

信太郎　おい、…どがんすればよか？

美咲　元気じゃなきゃダメだよ。

信太郎　…けど…。

☆　美咲、信太郎の頭を撫でる。ガヤガヤと廊下が騒がしくなり、美咲が信太郎から離れようとするが、間に合わず、そこへ 女子高生が二人やって来る。

紗央里　…今里？

信太郎　え？

☆　信太郎が居間の入り口を見ると、二人の女子高生が信太郎を指差して立っている。信太郎、慌てて美咲から体を離す。

信太郎　川西？

紗央里　何してんの？　あんた、ここで？

結衣　ホント、何してんの？。

☆　基子、後ろから付いてきていた様子で、

基子　こら、早う、入らんね。

紗央里　えー、何で今里がおると？

☆　基子、女子高生二人を居間へ 押し込む。

基子　信太郎はウチらの友達やけん。

結衣　そーなの？

基子　（女子高生二人に）よかけん、座り。

紗央里　ってかさ、休みの日まで顔見たくないんすけど。

信太郎　お前らが勝手に来たとやろうが。

紗央里　あんたに逢いに来た訳じゃないんですけど。

美咲　学校の子？

基子　よかけん、ホラ、座れって。

紗央里　えー？　いや。マジ、コイツいたら、コッチのテンション下がるんですけど。

信太郎　だけん、お前らが勝手に来たとやっか。

美咲　ねー、信太郎。クラスの子なの？

信太郎　あ、うん。

紗央里　キモ！　え？　もしかして…今里の彼女ですか？

美咲　いつも信太郎がお世話になってます。

信太郎　美咲。やめんね。

結衣　…ウチ、帰る。（居間から出ようとする）

紗央里　あ、ちょっと、結衣！

結衣　今里と一緒の空気なんか吸いとうなか！（そのまま玄関へ）

信太郎　あ、横石！（結衣を追いかけて玄関へ）
基子　お、おおおお？
美咲　おおおお？
基子　何だ、何だ？
紗央里　いや、結衣って物好きでぇ、今里に告ったらしいっちゃん、休み前に。
基子　おおおおおおお！
美咲　ふふふ。ちょっと覗いてやれ。（こっそり玄関を覗く）
基子　じゃあ、付き合いよっと？　あの二人。
紗央里　そいが、今里の分際で、結衣を振ったんだって。
基子　え？　可愛か子とに。勿体無か。
紗央里　結衣がウチに遊びに来たついでやけん、どうせやったらこの倉庫ば見せようと思って連れて来たとけど。
基子　へー。ってか、お前も高校生かよ。
紗央里　基子さん…、いっちょん変わらんね。
基子　オトナになったやろうもん。
紗央里　全然。
美咲　ち。声まで聞こえないな。

☆　祥子、玄関を除き見る美咲を不審な目で見ながら居間へ やって来る。

祥子　ごめんね、紗央里ちゃん。今日ね、ちょっとお客さんの来とるけん。
紗央里　あ、今里っしょ？
祥子　あれ？　知り合いね？
紗央里　同じクラス。
祥子　あー、そっか。同じ学校やったたいねぇ。
紗央里　ってか、この家に今里居ちゃ、まずいんじゃないっすか？
祥子　え？　あ、…そがん事なかよ。そがん事、学校とかで言うたらいかんよ、紗央里ちゃん。
紗央里　言わんけどぉ。

☆　愛実も居間へ 来る。

美咲　でもさぁ、全然女っ気ないとか言いながら、やっぱ、ちゃっかりしてるよね。
紗央里　いやぁ、ウチには結衣の趣味は解らん。（言い終わった後、愛実を見つけてギョッとする。）
美咲　何で？　信太郎、可愛いじゃん。
紗央里　え？　や、そうっすかね？　や、ウチはあんまり…。（答えながらも愛実が気になる。）
祥子　え？　何？　どがんしたと？
紗央里　あ、そうそう。もう一人、メンバー連れて来たんすよ。
祥子　あ、そうね。
基子　その子が、信太郎の姿を見るや否や、急に泣き出し、
美咲　信太郎のバカ！って言い捨てて、乙女走りで玄関へ。
基子　私との事は遊びだったのね！って。
紗央里　ちょぉ、やめて下さいよぉ。一応、結衣はウチの親友ですから。
基子　あ、ごめん。
祥子　え？　信太郎君の彼女が来とると？（祥子、先ほど美咲がやっていたように玄関を覗く）
基子　姉ちゃん！

紗央里　や、だからあ、彼女じゃないっす。 今里が振ったんです。 もういいじゃないっすか。
ってか、ウチが言ったって言わんでね、祥子さん。
祥子　（まだ覗きながら）うん。 言わんけど。
基子　ねー、ウチの倉庫で何すると？
紗央里　バンドの練習。
美咲　へぇー。 かっちょいい。
祥子　（戻りながら。）声までは聞こえんねぇ…。
基子　姉ちゃん。 倉庫ってばい、倉庫。
祥子　ああ、そうやんねぇ。 けど、お父さん、反対しよらすやろ？
紗央里　アイツは無視してください。
祥子　そがん言うてもねぇ。 もう一回、ちゃんとおじちゃんと話しておいで。
紗央里　あのくそジジィ。 ギターに触れば不良！って言うとばい。 頭おかしか。
基子　ぶははは。 おじちゃんにはギターなんかわからっさんさ。
紗央里　ウチの倉庫ば貸してくれればよかとけど。 でも、あそこ魚臭かけん。
祥子　ウチの倉庫も似たようなもんばい。

☆　信太郎と結衣、気まずそうに戻ってくる。

紗央里　結衣、大丈夫ね？（結衣の所へ）
結衣　うん。 ごめんね。
紗央里　こっちこそごめんね、まさか、（信太郎を見る）おるって思わんやったけん。
信太郎　……何か、ごめん。
結衣　もうよかよ。 そいはよかとけど、
祥子　あ、二人とも、ジュースくらい飲んで行かん？
紗央里　あ、はい。
結衣　や、ウチは…、
祥子　じゃあ、三人とも同じクラスね？
紗央里　そうです。

☆　居心地が悪そうにしている結衣を、基子と美咲が興味津々に見ている。
紗央里、その空気を察して、

紗央里　あ、祥子さん、一応、コイツがメンバーの横石結衣です。
祥子　あ、うん。 初めまして。
結衣　…初めまして。
祥子　せっかくやけん、座らんね、二人とも。
紗央里　や、今日は、やっぱやめとこうかな。
信太郎　（結衣に）座って行けば？
基子　座って行けばって事もなかやろうけど（笑）
結衣　よかよ。 そがん気使わんちゃ。
紗央里　あの、…んじゃ、また改めて来ます。
祥子　あ、そいぎん、また連絡するけん。 そいか、お父さんに言うとくけん。
紗央里　はい。 けど、あのオヤジの言う事は無視しとって下さい。
祥子　頑張って説得せんね。
紗央里　うーん。

結衣　…ごめんね、今里。
信太郎　何や。謝るなさ。
結衣　うん…。

☆　と言う二人のやり取りを、祥子と基子と美咲は興味津々で見ている。
紗央里、またその空気を察して、

紗央里　んじゃ、今日は帰ります。
結衣　何か、…すいませんでした。
祥子　ううん。また、ゆっくりおいで。
紗央里　（結衣を連れて玄関へ向かいながら）今里がおらん時に来ます。
結衣　もー、紗央里。
信太郎　だけん、悪かったって。
結衣　もうよかって。（今度は結衣が紗央里を押しながら玄関へ）
紗央里　（途中、信太郎を見て）チョーシに乗んなよ、今里。
結衣　紗央里！

☆　女子高生二人が玄関の方へ去って行く。祥子も見送ろうと後を付いて行きかけるが、
それより先に信太郎が玄関へ向かう。なので、祥子は居間へ残る。

紗央里　（声のみ）付いて来んな、お前。
信太郎　（声のみ）見送りやっか！

☆　祥子と美咲、玄関を覗く。その二人を愛実が見ている。基子、気まずさを感じ、

基子　姉ちゃん。
美咲　何話してんのかな？
祥子　何で振るっちゃろうね？　可愛かとに。
美咲　信太郎、女に興味ないのかな？
祥子　え？　そがん事のあるやろか？
基子　姉ちゃんって。
祥子　あ、はい。（居間に戻る）
美咲　そっかそっか。（居間に戻りながら）やっぱ、高校生は甘酸っぱいね。
祥子　（愛実に）信太郎君、モテるとねぇ。
愛実　何ば考えとるとやろうか。
祥子　え？
愛実　あがん…、人前で。
基子　あんくらいの事は、高校生にもなればあるさ。
祥子　そうさ。モテんよりモテた方がよかたい。
美咲　やっぱり、お姉ちゃんとしては嫌なんだ？
祥子　そいはあるよ。やっぱ、弟の恋愛って引くよね？（と、愛実に言ってしまい、慌てて自粛。）
愛実　……。
祥子　……。
基子　そう言えば、兄ちゃんは浮いた話も聞かんかったもん…、

☆　基子、言いながら、祥子の表情に気付き、言葉を引っ込める。
やや重苦しい空気の中に信太郎が戻ってくる。

美咲　　よ！　色男！（拍手）
信太郎　　やめんや、美咲！
美咲　　あんな可愛い子がいたんじゃん。
信太郎　　そがんじゃなかって、
祥子　　じゃあ、こいでよかとよね？　全員よね？
基子　　…多分。
祥子　　そいぎん、料理ば出そうかね。

☆　祥子、そそくさと台所へ。　基子も居た堪れず、立ち上がる。

基子　　ウチも手伝って来ようかね。
愛実　　ウチが行くよ。
基子　　やー、よかよ、愛実ちゃん。　座っとかんね。
愛実　　いや。　よかよ。

☆　愛実、台所へ 行きかけて、信太郎をからかっている美咲に目線を投げる。

愛実　　あんまり信太郎に構わんで下さい。（台所へ）

☆　愛実、言い捨てて台所へ。

基子　　また地雷ば踏んだごたんね。

☆　チャイムの音。　基子、美咲、信太郎、瞬間狼狽する。

祥子　　（声のみ）基子！　お客さん！
基子　　はーい。（美咲と信太郎に）ウチもまた地雷ば踏むけん。

☆　基子、言い捨てて玄関へ。

美咲　　は？

☆　愛実がグラスの載ったトレイを持ってくる。　信太郎と美咲、慌てて離れる。
愛実は何も言わず、黙々とグラスを並べ始める。
玄関から、公達の明るい声。

公達　　（声のみ）今日は、おいまで、ごめんねぇ。
基子　　（声のみ）あ、うん。　あ、上がって。
愛実　　…公達君も来らしたと?
信太郎　　…あ、うん…。
美咲　　基子が、呼んだんだって…。
愛実　　……。

☆　祥子が、大皿を持って居間へ。　玄関から来た公達、基子と廊下で会う。

基子　姉ちゃん、公達っちゃん。
公達　…来ちゃった。
祥子　……。
基子　あ、持つよ。

☆　祥子の手から大皿を取り、基子、居間へ戻る。　予想通り、重苦しい沈黙が流れる。

祥子　…基子、あんたは良かれと思ってしよる事かもしれんけど、もう夏彦が生きとった頃と違うとよ。
基子　そいは解っとる。
祥子　こがん、公達君にも迷惑かけて…。
公達　いや、おいは全然迷惑じゃなかよ。
基子　でも、…ウチは納得いかん。　確かに兄ちゃんはもうおらんごとなったし、辛かとは解る。　…ウチだって辛かった。　…けど、皆、あがん仲良かったとに、
公達　…基子ちゃん。
祥子　あんたに言うたって解らんやろう？　全然帰って来んちゃもん。
基子　どうせそうさ。　そがん言うと思っとった。
祥子　だって、本当の事たい。
公達　やめんね。　喧嘩せんと。　おいが来たとが迷惑なら、もう帰るけん。
基子　迷惑じゃなか！　皆、仲良かったたいね！　姉ちゃんば頼むって、公達っちゃんにお願いしとったたいね！
公達　…ごめんね、基子ちゃん。　おい、約束ば破ってしもうたね…。
祥子　謝らんでよ。　公達君のせいじゃなか…。
基子　……。
祥子　基子、…公達君のせいじゃなかとよ。　ウチの問題やけん、公達君には申し訳なかったけど。
基子　ウチは…、姉ちゃんに幸せになって欲しかっ…。

☆　公達、思い立ったように玄関へ。

基子　…そいは、…そがん迷惑な事ね…？
祥子　そがん事は言うとらんたいね。
基子　じゃあ、いつまでもこんまんまじゃいかんよ。

☆　気まずい姉妹の間を抜け、公達が真っ赤なバラの花束を持って入ってくる。
基子、公達を見て、小さく『頑張れ』の意味でガッツポーズを送る。

公達　祥子ちゃん。
祥子　…どがんしたと？　それ…。
公達　あの…。（花束を差し出す）お話が…。
祥子　……。
公達　いや、本当は、…きちんと二人きりで話すつもりやったとけど、
祥子　……何？
公達　…あの、

基子　頑張れ、公達っちゃん！
公達　実は、六年ぶりに、…またプロポーズを。
祥子　……。
公達　おい、今年いっぱいで実家に帰ろうと思って。
祥子　え？
公達　父ちゃん達ももう歳やし、そろそろ帰って家業ば継ごうかと思って。
祥子　…そうね。
公達　そいで、…最後のプロポーズやけど。もしも、まだ…おいの事嫌いじゃなかったら…。
　（祥子に花束を渡す…と言うより、押し付ける）
祥子　や、何言いよると？　こがん、人前で。
公達　あ、ごめん。　いや、今しかないと思って。
祥子　…こがん…、（言葉に詰まって花束を見る。）
公達　おいは、本当に何の取り柄もなかし、平凡な人間けど…。　でも、一緒になるなら、
　やっぱり祥子ちゃんしか考えきれんし…。
祥子　でも、…ウチは…ずっと公達君には迷惑かけたし…。
公達　そがんとは、おいは全然気にしとらんよ。
祥子　え？　や、ちょっと待って。　そがん、急に言われても…。
愛実　……。
信太郎　……。
美咲　……。
公達　……。
基子　姉ちゃん。
祥子　（みんなの視線に気付いて）　…ウチは、こがんと（花束）ば受取る資格はなかとよ…。

☆　祥子、仏間の前まで来て力なく座る。

基子　…姉ちゃん。
祥子　…ちゃんと、話さんばと思っとった。　ウチは、愛実に言わんば事のあるけん。
愛実　…何？
祥子　夏彦が死んだとは、信太郎君ば助けたせいじゃなかとよ。　…夏彦が死んだとはウチの
　せいやけん。
基子　姉ちゃん…、何ば言いよると？
祥子　…知っとったとよ、愛実…。
愛実　……。
祥子　あんたと夏彦が付き合いよったって。

☆　一同、驚き、愛実を見る。

愛実　……。
祥子　夏彦が死ぬ前の晩に…、愛実と結婚したかって。　本気で結婚したかって言うて来たと。
愛実　…夏彦が？
祥子　いつもは冗談ばっかり言いよるくせに、その日は真面目な顔ばして…。
　でも、まだ大学も出とらんとに、…そがん思って、反対したと。
愛実　……。

祥子　夏彦は、…いっつも口ばっかりで。 就職も決まらんし、当てのなか話ばっかりやったけん、ウチは…ついきつか事ば言うてしまったと。
今まで、あんたの為に、…ウチは結婚も出来んで頑張ってきたとにって。
勝手な事ばっかり言わんよって…。 そがん勝手な事ば言うとやったら…、もう…、この家に帰ってこんちゃよかって…。

基子　……。

祥子　愛実と結婚するなんか、絶対に認めんって…。

公達　そいは…、普通のお姉ちゃんやったら言うさ。

祥子　あの晩、夏彦もちょうど、こがん真っ赤なバラの花束ば持っとった。
『こいば、愛実に渡すと』って。

公達　や、なんて言うか…、そいは、プロポーズの定番やけんね…。

祥子　ウチは、そいば見てゾッとした。 その花束ば見て、心底嫌気の差した。
こがんとば、愛実に渡してどがんすると? あんたは、あの女がどがん女か知っとると?
冗談じゃなかって。 付き合いよるって聞いただけでもウンザリするとに、結婚なんかさせる訳にはいかん。

愛実　……。

祥子　あんたはまだ二十二ばい? そがん事考えとるなんか、思ってもおらんかった。
あんたは騙されとると。 愛実がどがん女か解っとらんとさ。
愛実は、だいにっちゃ甘えて、よか顔して、いっつも楽ばっかりしよるたいね。
（花束を見る）こがんとは捨ててしまいなさいって。 夏彦の手から花束ば取り上げたと。
床に叩きつけながら、絶対に許さんって。 もっとマシな女のおるやろうって。
あがん女に渡す為に、今まであんたば育てっちゃなかって。

☆　沈黙。

基子　姉ちゃん。

祥子　罰の当たったとやろうね。 夏彦はどこにもおらんごとなってしもうた。

公達　そいは…、仕方なかさ…。 祥子ちゃんは、本当に夏彦と基子ちゃんの為に一生懸命やったとやもん。

祥子　あん時の、…夏彦の悲しそうな顔…。 一生忘れきらん…。

☆　誰かが何かを言おうとするが、どうしようもない沈黙が産まれる。

祥子　もう…何ば考えてよかとかも解らん。 公達君や留美ちゃんがおらんごとなるって言うても、ウチにはよう解らん…。 夏彦がおらんごとなって…、誰ば恨んでよかとかも…。
姉ちゃん…。

基子　…何でこがん、何も解らんっちゃろうか…。 でも、そいも、自分では解らんとよ。

祥子　…知っとったとね。

愛実　……。

祥子　…祥子には言いきらんやった。

愛実　…本気で付き合いよったと?

祥子　…え?

愛実　…夏彦と…本気で付き合いよったと?

祥子　……。

愛実　ウチには、…夏彦が一人でのぼせとったごとしか見えんやった。

愛実　…結婚までは考えとらんやったけど、
祥子　考えられる状況じゃなかさ。当たり前たいね。
愛実　……。
祥子　あんたに渡す為に、夏彦ば育てよったっちゃなか。
愛実　……。

☆　美咲、祥子の側へ歩み寄る。そして、祥子を抱き締める。

美咲　やっぱり、お姉ちゃんが一番寂しいんだよね。基子もそうだった。
　出会った頃は、本当に寂しそうでさあ。…でも、寂しい人は優しいもん。
　基子だったら、友達になれると思った。
基子　美咲…。
美咲　でも、ここに来て、びっくりしたよー。

☆　美咲、祥子から離れ、縁側へ向かう。

美咲　（移動しながら）この家は、寂しそうなんだもん。こんなに綺麗なところなのに、
　…どうしようもないくらい寂しそう。

☆　美咲、海を指差す。

美咲　お姉ちゃん。夏彦さんはココにいるよ。ここから見えるものは、全部お姉ちゃんのでしょ？
祥子　……。
美咲　よかったね。これで、もう誰にも取られないよ。
祥子　……。
愛実　……。
公達　でも、そがん…。おいは、こんまんま祥子ちゃんば一人では置いて行けんよ。
美咲　公達っちゃんに何が出来るの？
公達　…そいは…、
美咲　答えを見つけた人に、止まってる人の気持ちなんか解んないよ。

☆　基子、美咲へ歩み寄る。

基子　美咲…。
美咲　基子も、もう先へ進みたくなったんでしょ？
基子　…ウチは、本当にあんたには感謝しとる…。
美咲　しなくていいよ。
基子　……。
美咲　だって、私の方があんたの寂しさを利用してたんだもん。

☆　再び沈黙が襲う。公達、ティッシュの箱を持ち上げる。基子、それに気付き、公達から
　ティッシュの箱を受け取り、祥子の前へ持ってくる。

基子　…姉ちゃん。…ごめんなさい。
祥子　え？

基子　…ごめんなさい。
祥子　…何ね？（基子の頭を撫でる）何ば謝りよると？
公達　…おいは、…平凡な人間やけん。何も取り柄もなかし、何もしいきらんけど、早う…みんなが元気になればよかって思いよったよ。
愛実　…結局は、祥子と公達君が結婚出来んやったとは、ウチのせいたいね。
祥子　だけん、違うって、
愛実　…祥子がこがん状態で、ウチだって、どがんしてよかか解らんもん。
祥子　愛実のよかごとしてよかたいね。
愛実　……。
祥子　…夏彦ば殺したとはウチよ。
信太郎　違うばい。おいのせいばい！
祥子　ウチが、夏彦ば傷付けたとやもん。
信太郎　本当に違うとよ、祥子姉ちゃん。夏彦兄ちゃんは、元気やったもん。
祥子　あの日、一緒に海に行った時、兄ちゃんは元気やったもん。
信太郎　…よかとよ、信太郎君…。
基子　拾った貝殻ば胸に当てて、『ビキニ』ってしよらしたもん。
信太郎　…ぶ。
祥子　おいも一緒にしよったもん。
信太郎　……。
　ビーチバレーばして、『稲妻サーブ』って言いながらサーブしよらしたし、
　おいが勝ったら、不貞腐れてずっと文句言いよらしたし、水ん中で逆立ちして、
　鼻に水の入ったって暴れよらしたし、
基子　…兄ちゃん。
公達　目に浮かぶごたんね。
信太郎　一緒に、競争って言うて、泳ぎよったっちゃん。…そしたら、急に体の重たくなって、…兄ちゃんが…、掴まれって。ココに掴まれって、腕ば伸ばさしたけん…おい、…必死で…、
信太郎　通りかかった船のおじちゃん達に助けてもらったとけど…、兄ちゃんは…、
祥子　……。
愛実　……。
信太郎　ごめんなさい。祥子姉ちゃん、基子姉ちゃん、ごめんなさい。
祥子　…夏彦…。
基子　信太郎ば助けたとは、兄ちゃんの意志やもん…。
公達　そうさ。あいは、事故やったとやけん…。
祥子　…元気やった？　夏彦は。
信太郎　うん。…いつもの兄ちゃんやった。
祥子　…そうね。
　信太郎　ずっと、兄ちゃんの声が聞こえよった。兄ちゃんは、…最後に…、
基子　……何か言いよった？
信太郎　…うん。…言わしたけど…。
祥子　何て？
基子　信太郎、教えてくれんね。
信太郎　…おいの聞き間違いかもしれんけど…、
基子　うん。
信太郎　『姉ちゃん、プリン』って…。

☆　沈黙。全員が夏彦の最後の言葉を頭で反芻する。堪えきれず、基子が吹き出す。
それにつられたように、祥子も笑いを漏らした。

基子　…兄ちゃん、バカやね。
祥子　…ホントに。
信太郎　聞き間違いかもしれんけど。
美咲　プリンって言ったの？　マジで？
信太郎　いや、…おいの聞き間違いかもしれんけど、
基子　いつもの事やん。姉弟喧嘩した後に…。ねー、姉ちゃん。
祥子　そう。いっつも、そがん言うて来るとよ。姉ちゃん、プリン作ってって。
公達　ははは。プリンってね？
美咲　プリンなんだ？
祥子　そこの廊下のところに立って、…ちょっとはぶてたごとして、『姉ちゃん、プリンば』って。
信太郎　…おい、ずっと、…誰にも言えんで…。
基子　あははは、あー、バカばい！　兄ちゃん！
愛実　ふふ。（堪えていたが、堪らず笑いが漏れる。）
公達　本当に、どこまでも夏彦やね。

☆　波の音が、どこか開いているらしい窓から入ってくる。

基子　よかったね、姉ちゃん。
祥子　え？
基子　…兄ちゃんと仲直りせんばたい。

☆　波の音は、何かを告げるように一際大きくなる。
。

祥子　…夏彦。

☆　そして、静かに引いていく。

美咲　…海の匂いがするね。
信太郎　……。
基子　兄ちゃんは、海が大好きやったけんね。
祥子　そうね。しょっちゅう海で遊びよったもんね。
基子　案外、…まだ泳ぎよるっちゃなか？

☆　沈黙。そうであって欲しいという願いと、そんな事ある訳がない…という空白。
祥子、立ち上がる。

基子　姉ちゃん？
祥子　コレ、花瓶に活けようかね。
基子　え、あ、うん。
祥子　…公達君。ウチは、
公達　…いや、よかよ。その花は、枯れるまで祥子ちゃんの側に置いとって。
祥子　…うん。あ、…愛実、まだ夏彦に手ぇ合わせとらんやろ？

愛実　え？　うん。
祥子　信太郎君もまだやろ？
信太郎　はい。
祥子　行ってやって。　…喜ぶと思うけん。

☆　祥子、言い残して台所へ。　取り残された面々は、しばらく空白の時間を過ごす。
その空白の時間に、それぞれがこの五年間に思いを馳せる。
祥子の空白の五年を、それぞれが思う。
美咲は、その人たちの時間が動き出すのを見ていた。
そして、ただ一人、ここで生き続けていくであろう祥子の姿を。

基子が思い立ったように、愛実と信太郎を仏間へ 促す。

基子　最後やけん、兄ちゃんに言いたか事は、何でん言うて来て。
愛実　…基子ちゃん、ウチ…。
基子　あとは、ウチラの問題やけん。
愛実　……。
基子　もう 姉ちゃんの言う通り、今日で最後にしよう。

☆　愛実、何かを言いかけるが言葉を引っ込める。　そして、信太郎と一緒に仏間へ。

☆　祥子が、花瓶に活けた赤いバラを持って居間の前の廊下へ 来る。
基子と笑い合い、美咲の側を通り過ぎる。　すれ違う瞬間、美咲が一本のバラを抜き取る。

美咲　綺麗。
祥子　うん。
美咲　でも、キレイすぎて怖いね。

☆　祥子、居間へ 入ってくる。

祥子　そいぎん、…こいで全員かね？
基子　…うん。
祥子　じゃあ、始めようか。

☆　祥子、テーブルの中央へ 花瓶を置く。
赤い花が、場違いに部屋の中央を占める。
仏間からりんの音が響き、祥子が仏間を見る。

☆　暗転。

☆　二〇〇八年八月十五日　午前九時の少し前。
場面は阿部家。
居間のテーブルには、まだ場違いな赤いバラが花瓶に活けてある。
大きな荷物が二つ。　居間に座り込んでいる美咲。
そして、縁側に仁王立ちし、外からの風を楽しんでいる基子。

基子　気持ちよかねぇ。
美咲　閉めなよ。　クーラー効かないじゃん。
基子　毎日、こいが兄ちゃんとの日課やったとばい。
美咲　何が？
基子　こっから、自分の分の島のパトロールばしよったと。
美咲　はぁ？　二人で？
基子　ウチが東京に行くまでしよった。
美咲　へぇ。…ホントにバカだったんだ。
基子　何だと？

祥子が、ジュースの入ったコップを二つ持って来る。

祥子　ね、コレ、飲んでいかん？
美咲　あ、ありがとう。　お姉ちゃん。
祥子　荷物、車に積みよくけん。
基子　よかよ。　自分達でするけん。
祥子　ホラ、あんたも飲まんね。
基子　何？
祥子　オレンジジュース。
美咲　（一口飲む）すっぱ！
基子　懐かしかね。　こい、ようウチにあったよね。
祥子　信太郎君が好きやったけん、今年も用意しとったとけど。　結局飲まっさんやったけん。
美咲　すっぱ。　すっぱぁ。
基子　（一口飲む）すっぱぁ！
祥子　そがん、大袈裟かね、あんた達。
美咲　コレ飲むくらいなら、まだ、ビールの方が甘いよ！
祥子　…そうね。　信太郎君、子供の頃から味覚のおかしかったもんね。
基子　ってかさ、コレ、兄ちゃんが信太郎に飲ませよったとばい。　罰ゲームって。
祥子　罰ゲームってね？
基子　そうさ。
祥子　あら、好きけん、あがん飲みよったとかと思った。
美咲　信太郎、次会うときは、ちょっとは明るくなってるかな？
基子　どうやろうねぇ。
美咲　ってか、普通にしてれば、ただのバカなのに。
基子　結局、アイツが一番、兄ちゃんにソックリばい。
祥子　そうかもしれん…。　本当に兄弟みたいやったもんね。
基子　……。
美咲　結局、お礼…してあげれなかったなぁ。
基子　お礼？

美咲　結局、アッサリ、あの子とくっついちゃったりするんだろうなぁ。
祥子　あの子って、結衣ちゃん？
美咲　そうそう。
基子　やー、信太郎に、あがん可愛か子は勿体なかばい。
祥子　そうねぇ、どがんなるっちゃろうね？
基子　姉ちゃんは、人の事より自分の事ね。
祥子　…偉そうに。
基子　あん？
祥子　あんたから心配されたらお仕舞いばい。
基子　ウチだって、心配くらいするさ…。
祥子　ホラ、もう出たほうがよかよ。 急がんね。
基子　もう心配してやらんけんね。
祥子　よかけん、早う飲んでしまいなさい。
基子　もう要らん。 大体、何でこがんとぼ飲ませるとね。

☆　祥子、床に置いてある大きなバッグ（基子のバッグ）を手にする。

基子　あ、よかよ、姉ちゃん。 自分でするけん。
祥子　え？ あ、うん。
基子　…体に気を付けてね。
祥子　そいはあんたやろう。 あんた、ホントにちゃんとしなさいよ。
基子　…うん。 ウチ、もうちょっと東京で頑張ってみる。

☆　基子の言葉に、美咲は驚いて基子を見る。 が、何も言わない。

祥子　うん。 ちゃんとしっかりね。
基子　はーい。
祥子　美咲さんも、…何か色々あったけど、ありがとうね。
美咲　うん。 楽しかったよ。 いろんな意味で。
祥子　また、気が向いたら基子と遊びにおいで。
美咲　そうだねぇ。 まぁ、気が向いたらね。
祥子　じゃあ、行こうか？ 駅までは混まんと思うけど…、や、解らんもんね。 もう出よう。

☆　祥子、先に玄関に向かいながら、基子と美咲はそれに従いながら、居間を後にする。

祥子　（声のみ）あ！ ちょっと待って！ ろうそく、消した？
基子　（声のみ）知らんよ。 今日は点けとらんやろ？
祥子　（声のみ）や、ちょっと見てくる。

☆　祥子が慌てて居間へ入ってきて、そのまま仏間へ消える。

基子　（声のみ）先に車に載せよくけんね。（ドアから外へ）
祥子　（声のみ）うん。

☆　美咲も廊下へ戻ってくる。 そして居間へ入り、縁側から外の海を眺めている。

祥子、素早く仏間から出てきて、外を見ている美咲に気付く。

祥子　美咲さん、何しよると？　行くよ？
美咲　ろうそく、点いてた？
祥子　うん。　点いとったよ。　良かった、思い出して。
美咲　この海ってさぁ、ムダにキラキラしてるよね。
祥子　ムダにって…。（縁側へ）
美咲　私も逢ってみたかったなぁ。　夏彦さんに。
祥子　…そがん、会ってみたかってほどの子じゃなかったけど。
美咲　けど、もしかしたら私のトリコになっちゃってたかもしんないしね。
　　そしたら、お姉ちゃんに怒られちゃう。
祥子　…美咲さん。

☆　祥子、美咲を睨むが、その後笑い合う。　少しの沈黙。
　二人は海を見ている。

祥子　美咲さん、
美咲　お姉ちゃん。
祥子　何？
美咲　お姉ちゃんこそ。
祥子　や、…何でんなかよ。
美咲　…ここはいい所だね。
祥子　そう？　気に入った？
美咲　時間は止まってるけど、…皆、人を傷付けないように生きてる。
祥子　……普通はそうやろ？
美咲　いろんな事が、ゆっくり流れてる。
祥子　そいけん、気が向いたら、いつでも遊びにおいで。
美咲　ヤダよ。　遊ぶとこ少ないし、夜開いてる店も少ないし。
祥子　そがんと、東京と比べたら違うさ。

☆　玄関より、基子の声。

基子　（声のみ）何しよるー？　行くばーい。
美咲　（玄関へ）はーい。　さ、帰るか。
祥子　ホントに、気が向いたら、いつでもおいで。

☆　美咲、答えずに縁側を離れる。　祥子、一人残って海を見る。
　祥子の視線の先には、美咲の言う通り、光を乱反射している海が広がっている。
　美咲、廊下、階段下に立ち止まり、居間を見た。

美咲　じゃあ、今度は、美咲にもプリンね。

☆　祥子が振り返る。　美咲の姿はなく、玄関方向に足音が聞こえる。
　祥子も小走りにそれを追った。　廊下から、二人の笑い声。

☆ 玄関の開く音。

祥子　わ、今日は、風の強かねぇ。

美咲　うわー！ メッチャ海の匂い！

☆ 玄関から入る風が、阿部家の居間を駆け抜けていく。

少しだけ、空気が動く。

風は居間を抜けて、潮の香りを残した。

波の音が、段々と大きくなる。

長崎県佐世保市鹿子前町。

潮の香りに包まれて、打ち寄せる波のように、繰り返し毎日を過ごす人々。

祥子たちの目の前にも、いつもと変わらない景色が広がっている。

でもそれは、変わらないようで変わっているのかもしれない…。

時には、変わらないことも、住む人にとっては必要なのかもしれない。

明日見るこの景色は、今日ほどは優しいものではないかもしれない。

景色を歪ませているものは、その人の中の心かもしれない。

そして、この瞬間に見た景色を心にとどめようとする事は、

居なくなった人たちの影を追う行為と同じかもしれない。

人は、そうしながら、目の前に広がる景色の中で生きて行くのだろう…。

あの日彼を飲み込んだ海は光を乱反射しながら、

今日も静かに満ち引きを繰り返している。

閉幕。